
殺人鬼は異世界に来てしまったようです

himame

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人鬼は異世界に来てしまったようです

【Nコード】

N7170Y

【作者名】

himame

【あらすじ】

自分の快樂のために殺し続けた殺人鬼は暇潰しで行なった黒魔術で異世界へと飛ばされてしまった！？魔王という存在と出会いこの世界を知った殺人鬼は魔王と手を組み共に生きていく。剣と魔法の世界の中を殺人鬼はどうやって生き残るのか。これは一人の殺人鬼の物語——だよな？

最近の殺人鬼は異世界にいけないと駄目らしい（前書き）

「殺人鬼？いえいえ俺はただ殺すのが大好きなだけです。」

b y 主人

公

最近の殺人鬼は異世界にいけないと駄目らしい

既に空は黒く染まり綺麗な満月が見える晴れた夜空。周囲を山に囲まれた村があつた。

「
・
・
・
・
・
こんなもんか。」
」

その村の中を一人の男が歩いてゐた。年は十八歳程だろうが、全身を黒いコートで包み月明かりに照らされたなか頭にかぶるフードから覗く白い髪とその間から僅かに覗く妖しく光る赤い瞳。その姿はまるで鬼のようであつた。男は口元に笑みを浮かべ手で引き摺つてきたものを投げた。

「これで最後——と。」

男の投げたものは地面に鈍い音を發てて落ちた。その投げ捨てられたものからは赤黒い液体が流れ出る。やがて月明かりがその投げ捨てられたものを照らす。

それは人だつた。顔は恐怖の色で染めた表情で固まる老婆の死体。男はそれを見て笑を深める。

「いやあ、苦勞したねえ。．．．ま、その分中々の光景なんだけどさ。」

[illegible]

死体はどれも絶望したような表情や恐怖で歪んだ表情ばかりだ。ある者は片腕を失いある者は顔の半分が消し飛んでいる。なかには腹が裂け臓物が出ているものもある。その死体に囲まれた中男は愉悦に染まった顔で笑っている。

「さ、始めようか！この俺の今世紀最大のショーを！！」

男は死体の中を歩きながら叫ぶ。男は殺人鬼だった。今まで何千何万という数の人を殺し続けてきた生粋の殺人鬼。

やがて殺し続けてきた男は退屈しないよう趣向を凝らして様々な殺し方をするようになった。これもその一つ。今では誰もが口を揃えてこう言うだろう。「有り得ない」と。彼が行うものはそう――黒魔術だ。

よく見れば死体は何らかの模様を描くように配置されているのが分かる。直径は恐らく100mを程のもの。それを描くのに犠牲になった村人の数は実に100人を超える。男は別にこれが失敗しても構わない。只自らの退屈を紛らわせる為だけに行なっていることだ。失敗しても場が白けるだけ。

「（いや、それは嫌だな。）」

そう考えながらも男はこれをやめることはない。やがて男は魔方阵から出ると鈍い輝きを放つ一つのナイフを取り出す。男はそれを持つと躊躇うことなく自分の指を切る。切り傷からは真っ赤な血が少しずつ流れ男はその流れ出る血をうつとりとした表情で眺める。その様子は誰が見ても気が狂っているとしか思えないだろう。やがて血は一滴の滴となって方阵へと落ちた。

コオオオ

血の滴が触れた直後方陣からは僅かな光が漏れる。

「あ？」

男はその様子に首を傾げる。男としてはこれが成功するとは思わなかった。いや、成功して欲しいという思いもあったがそんなものは明日地球が滅ぶという何万何億分の1でのものでしかない。徐々に溢れ出る光を見て男はもう我慢しきれないとばかりに盛大に笑った。

「くくく、ふふ、くかかかヒヤハハハハハハハハハハ！！！！！！」

男は手を広げ笑う。その瞳は無邪気な子供のように輝いていた。

「おいおいおい、スツゲエなあ！スツゲエよ！！何だ何だ何だあ！？何が起きるってんだよ！？悪魔か？天使か？何でもいいから俺を満足させてくれよ！！！！」

その言葉と共に飲み込まれていく男。やがてその光は男の視界を白く塗りつぶし

男は草原の中に立っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・Why？」

草原でポツンと立ち口を開いた男の間抜けな声は嫌に響いて聞こえた。

あー、変な光に巻き込まれた俺だ。取り敢えず現状を把握しようとして動き回ったんだが、どうやら俺の荷物は近くに落ちていたようだ。いやあ、助かったね。今回村一つ潰すのに弾薬と火薬と後食料とだ、いぶ持ってきたからな。

「これ持って辺り散策するか。」

不可解なことが起きたら取り敢えず口に出せ。それで結構頭の中が整理されるもんだ。……少なくとも俺は。

「原因は十中八九あの黒魔術。」

まさか成功するとはねー。どんなものか知らないけど。本にあったの適当にやっただけだし。

「あんだけ殺した甲斐があつたつてもんかね。」

俺はその時の光景を思い出して思わず笑みを浮かべる。今までの中でも結構面白かったほうかな。興奮したもんだね。

「……………」

ま、何にしても現状把握、現状把握つと。まず俺の周囲に広がっているのは草原。まあ、これといったものはなし。さらに遠くに森が見えるな。他は……………何もなし。

「情報なさすぎだろ。」

思わずそう呟いてしまう俺は悪くない。……疑問に思つかもしれないが俺はヒトを殺したがる以外は一応まともだぞ？

「まずは森行つて。ほかは後で決めよ。」

行動しないと何も始まらねえ。俺は木箱の中にあつた付けそうな火薬と弾薬それに食料をカバンに入れ森へと向かった。数分後に聞こえた置いといた火薬の爆発音をBGMにして。

只今森の中でございます。リポーターはこの俺。

とまあそんな感じで進んでるが、あれだ。草原と森の中違いすぎじやね？なんだか猿だか鳥だかよく分かんねえ声が聞こえる。

「……………今日の晩御飯は何でございましょうか？」

そんな呑気なことを言っている俺の前に現れたのは腕が2m位ありそうな猿なのかゴリラなのかよく分かんねえ生物。見た目は猿っぽいが多分体はゴリラ。何か筋肉がとんでもねえもん。それで俺の記憶で該当するのはゴリラ。何千何万とヒトを殺してきた俺には分かるあいつの異常さが。俺の目は人体構造が人に近けりや近いほどそいつの行動、構造が手に取るように分かる。

「ウホッ！キキキ！！」

何か猿ゴリラ（俺命名）がどつちなのか分からねえ鳴き声を上げて俺に飛びかかる・よし、なら

「俺流初対面の方へのご挨拶——！！」

俺は飛び掛る猿ゴリラの顔面に右ストレートを放った。その拳は驚くほど綺麗に決まり反対に猿ゴリラの拳は俺を外し後ろの木を挟る。殴られた猿ゴリラは顔を仰け反らせそのまま吹き飛ぶ。因みに猿の速度は常人より遥かに速い。俺がそれを捉えられたものはあるものの御陰だ。

俺は頭のどこか（どこか忘れた）がぶっ壊れてて本来ヒトがセーブしている力を俺は全て引き出すことができる。御陰で小さい頃から俺の体中の骨が折れまくった。だがその肉体を極めればそいつはどうなると思う？ 答えは

「最強の肉体持った人間の出来上がりだー！！！！！」

俺は吹き飛ばされた猿ゴリラの顔に躊躇なく踵落としをする。その衝撃で猿ゴリラの顔面は見事に変形し白目をむいている。あれ食らってまだ生きてるのかよ。

俺はポケットからナイフを取り出し

「お疲れさんつしたー。」

首を切り裂いた。猿ゴリラは二、三度跳ねるとやがて動かなくなつた。

「・・・見事に地球外生命体です。本当に（ry」

改めて猿ゴリラの全身を見た俺はその姿に此処が少なくとも日本ではないと判断した。というかあの魔方陣の時点で大体予想つくけどさ。

俺は木々の隙間から日が暮れてきたのを確認するとそこらへんから木の枝を持ってきて火をつける。

今日は此処で野宿かね。俺はそう考えながら明日からの行動を考

えていった。

P S : 猿ゴリラの肉は少し固かったです。

殺人鬼はRPGのラスボスに挑戦したようです（前書き）

「怪しい人に声をかけられたら？右ストレートでこんにちはだろ。」

b

y主人公

殺人鬼はRPGのラスボスに挑戦したようです

おはようございます。太陽が憎たらしいほどに輝いてやがる朝でございます。

「・・・・・・・・・・。」

まずは周囲の確認。相変わらず周囲は木々で埋めつくされてる。

「・・・・・・・・どうせなら夢であって欲しかった。」

俺はそう目の前の現実になんて愚痴りながら立ち上がる。化け物どもは寝る前にピアノ線を周囲一帯に張り巡らせたから一応大丈夫だと思うんだが。念には念をと言うことでピアノ線を見る。

「わお。」

一部のピアノ線が血塗れになって張ってあるのを発見した。そしてそのピアノ線に引っ掛かっているよく分からない獣の死体。チータのようにも見えるがその死体には目が三つあり角が生えている。さらにそこからすぐ近くにはもう一つの死体。・・・・こいつらって学習能力ないのかね。何かもう一つの死体はゲームで出てきそうなゴブリンの様な死体。

「・・・・・・・・・・?」

見ればゴブリンが腰に着けている巾着袋から鉱石のような赤い欠片が見える。俺はそれを取り出すと日に照らして眺める。

「・・・・・・・・何だこれ？」

日に照らされキラリと光る赤い欠片。俺は取り敢えずそれをポケットの中に入れる。取り敢えず巾着袋にはもう何も無いようなので獣の死体を見る。

「・・・・・・・・朝飯にするか。」

俺は獣の死体を掴むと寝床にある木の枝を組み再び火をつけた。これはなかなか・・・・・・・・。

朝食を食^{けもの}べた俺はピアノ線を回収し鞆を持つと歩きだした。

「獣はなかなか・・・・・・・・ただ実際に戦って仕留められるのか。」

生憎衝動に駆られて殺すただの快樂殺人者じゃないんでね。先のことも考えて行動しないと後で痛い目を見る。現にそういつた奴を何度も俺は見てきた。

俺が暫く歩いていく周囲の草がガサガサと揺れる。俺はその音を聞くと共につい条件反射で

ダァン！！

懐からデザートイーグルを取り出し引金を引いた。それと共に放たれる銃弾と硝煙の臭い。放たれた弾丸は一瞬で目標へ到達し

「ギャ！？」

目標は短い悲鳴を上げ血飛沫と共に倒れた。俺は銃とナイフを構え周囲を警戒する。すると草が揺れると共にピアノ線に掛かっていたゴブリンとよく似た奴らが飛び出してくる。

「・・・・・・・・・・。」

数は10、いや俺に向けられている殺気の数15。まだ何処かにいやがるな……。ゴブリン共の表情にはハッキリとした殺意と憎悪が受け取れる。さっきの一匹を殺したことを恨んでるのか？

「中々仲間思いじゃねえか。・・・けどよ。」

ダン！

俺は一匹のゴブリンに向け引金を引く。放たれた弾丸はゴブリンの眉間に穴を開け、また一匹が死んだ。

「俺は優しくねえからよ。」

流れ出る血から漂う鉄の臭いと銃口から昇る硝煙の臭い。それは俺を興奮させ殺人鬼としての本能を刺激する。

「精々足掻けや、虫螻があー！！！」

俺は目の前にいた一匹のゴブリン目掛けて駆ける。目の前で突然仲間が死んだことに動揺しているのだろう。ゴブリンはろくな抵抗も出来ず首を切り裂かれ血飛沫を上げながら血の海に沈む。俺は頬に掛かった血を舌で舐める。

「ヒカカカカカ！！！！脆すぎだろお！？殺る気あるのかあ？」

再び駆ける俺。残りのゴブリン達は状況を理解できたのか俺へ向かって殺到する。振り下ろされる棍棒、俺はそれを片手で受け止めるとそのゴブリンの首を掴みへし折った。骨の折れる鈍い音がしゴブリンの首はぶらぶらと揺れる。

「ギャア!!!」

俺が一匹のゴブリンに集中していると背後からもう一匹のゴブリンが俺の頭に棍棒を振り下ろす。

「んなもん食らうかよぉ!!!」

俺は飛び掛ってきたゴブリンに先程の首が折れた死体をぶつける。それによってゴブリンのバランスが崩れ後ろにいた仲間達を巻き添えにして転倒する。それを見た俺はそのゴブリンにピンを抜いた手榴弾を投げその場を離れる。背後から俺を襲う爆音と衝撃、俺は転がりながら体制を立て直すとその爆心地を睨む。其処にあるのは小規模なクレーターそして辺りに飛び散っている肉塊と血。俺はそれを見て口笛を吹く。

「随分スッキリ消えたなあ。」

あれだけの距離だったんだ当然俺も無事な訳がない。左手に走る痺れと痛み。火傷で済むってのは人間やめてるとしか思えないな。

「残りは5匹。さあて何処にいるんだい？」

手の中でナイフをくるくると回しながら俺は周囲を見渡す。次の瞬間俺の脇腹に刺さる矢とはしる痛み。

「ギャギャギャー!!」

ゴブリンは俺に当たったのが嬉しいのか声を上げる。その行動に俺は口元を歪ませた。やっぱこいつら馬鹿だ。

「死んじまえよお!!」

俺は声が聞こえた場所へ弾丸を連続で放つ。ゴブリンは苦し気に呻きやがて倒れる音が聞こえる。

「あと四匹。さあ次はどいつだあ?」

その言葉と同時にまた引金を引く。そしてまた聞こえる血飛沫と断末魔の声。

「さ、残りは三匹。」

ガサガサという音共に聞こえる三つの足音。ただその足音は徐々に遠ざかっている。

「……………逃がすと思ってるのか?」

先に手を出してはいすみません?んなもん聞いてもらえと思ってんのか?俺はその足音の下へと駆けていく。

「舐めてんじゃねえぞ。小鬼風情が!」

俺は口元を歪め瞳を輝かせながら駆ける。やがて見えてくるのは三匹のゴブリン。奴らは俺の半分程の身長しかないんだ当然歩幅など

俺より遥かに小さい。見えてきた標的を前に俺は舌舐りをする。
良いぜ良いぜ良いぜ。そうだその命を燃え上がらせる！俺にその命
の燃え上がる様子をみせてくれ！！

俺は手に持ったデザートイーグルを奴等に向け、引金を引いた。炸
裂する弾丸、血飛沫を上げ血の海をつくっていくゴブリン。

「堪んねえなあ！！これだから殺すのは止められない！！」

俺は額に手を当てて顔を覆いながら高笑いを上げる。最早此処が何
処であろうと構いやしない！これが俺が求めたもの。この血風と快
感を感じることができるこの場所が俺が求めたものだ！！ダイヤの
金の輝きすらも凌駕する人の魂の輝きそれを俺は見続けたい！！！！

「だからどうよ爺さんよお？」

俺の背後に立つ一人の老人。見た目は只の老耄だが中身がまるで違
う。何か巨大なものを無理矢理人という容物に詰め込んだ化け物だ。

「是非とも俺と踊ろうじゃないか。爺は好みじゃないんだがな。」

俺が問いかけると目の前の老人は笑う。

「ふふふ、こんな老耄と踊ってくれるのかのお。良いじゃろう。」

老人が何処からともなく一本の杖を取り出すと地面にコンとぶつけ
る。それが合図かのように老人の背後に出現するのは無数の方陣。

「たつまんねえ。こんなに昂るのは久しぶりだよ！！俺にもっと生
を実感させやがれえ！！！！」

俺は今までにない程の速度で目の前の老人に疾走する。老人はその姿を見てニヤリと笑った。

「くくく、いいな。この俺『魔王』に挑むとはな。」

一瞬老人の姿がぶれ、一人の長身の男が現れる。全身が黒く牙のようなものを生やし、背中には翼が生えている。

こいつは言った。魔王だと。俺は思わず笑を浮かべる。おもしれえ。

「見せてくれよ！魔王様の實力つてやつをよお！！！」

降り注ぐ方陣からの光をくぐり抜け俺は奴の目の前に出る。振りかぶる右腕。相手も俺と同じように左腕を振りかぶる

「ッラア——！！！」

「フツ——！！！」

ぶつかり合う拳。だがその決着は一瞬だった。

メキヤ

鈍い音を発て潰れる俺の右腕。それは骨が折れ腕から突き出ていた。

「——」

その痛みに俺は顔を歪める。だが——

「くたばれよ。」

最後の力を振り絞り放たれた銃弾。それは魔王の眉間を確実に貫いた。

「ムウ——」

魔王は僅かによるめき仰向けで倒れていく。その様子を見て俺の意識は闇の中に落ちていった。

「・・・・・・・・・・。」

あ？ここ何処だよ。俺はそう思いながら起き上がる。既に夜空には満点の星空が広がり大地を照らしている。あの爺は何処に行きやがった。つか何で俺生きてんだよ。

俺は自分の右腕を見る。そこにはあるのは無事な右腕ついでに火傷も綺麗に治っていた。

「む、目覚めたのか。」

俺が立ち上がって体の調子を確認していると茂みの奥から魔王とか名乗っていた男が現れる。男は俺の視線を気にせず近くに座ると隣を叩く。・・・・座れと？

聞きたいこともある。俺はそのことを考えると魔王の隣に座る。

「・・・・・・・・何で俺を生かした。」

「開口一番がそれかのう。」

魔王は面倒臭そうに頭を掻く。うるせえよ、俺には重要なことなん

だよ。

「主には興味があったからのう。『門』を開けるものなど何千年と
いなかったからのう。ましてや向こうの者が開けるなど初めてじゃ。」

「『門』？」

「主ではないのか？」

魔王は首を傾げる。・・・門。思い当たるのはあの光。

「・・・たぶん俺だ。」

「やはりか。門を開けられるなど儼ぐらいじゃからのう。」

魔王は頷くと俺に顔を近づける。

「で、どうやって開けた？」

質問ばかりだなこいつは。少しは俺にもさせやがれ。

「大量のヒトの死体を集めて模様を描いたんだよ。そしたら光に包
まれてここにいた。」

「人？主はどれだけの人間を殺した？」

「さあ、その『門』ってやつを開けるのに百人近く、今まで全部含
めて何千何万・・・よく覚えてねえよ。」

俺にとって殺すのは飯を食うのと同じくらい自然なこと。正確な数なんて覚えてる訳がない。俺の言葉を聞いて魔王は愉快そうに笑った。

「フハハハハハハハ！！！！主は本当に人間か！？そんな者など聞いたことがないぞ！！？」

「当たり前だ。他にもいたら世の中の人間は殆ど死んでるぞ。」

その言葉を聞いて魔王はさらに笑う。うるせえんだよ。

「で、今度は俺の番だ。向こうってのは何だ？」

まず最初に聞きたいこと。此処がどこなのか、向こうとは何なのか。話とあのゴブリン達で大体の予想はつくが・・・

「向こうってのは主が生きていた世界じゃ。この世界は『アリアンロッド』と言ってな。お前達の住む世界とは別の世界じゃ。」

・・・さいですか。いや、むしろゴブリンやら魔王やらが地球にいる方が驚きだけどさ。慣れっつてのはとんでもないな、ここが異世界だと言われてもまるで驚かない。

「で、魔王様は何でこんな所にいるんでしょうかね？」

皮肉を込めて俺は魔王に問う。魔王は腕を組んで悩むと何か思いついたのか言った。

「実は後継者を探していてな。ちょうど門を開いた者がいたから押しつけ・・・もとい継いで貰おうかとな・・・。」

「巫山戯んな。」

俺はそう吐き捨てて立ち上がる。そして歩き出そうと踏み出し――
―足を掴まれた。

「離せ。」

「まあ、待て。主はまだこの世界のことを知らんじやろ？」

確かにそれはそうだ。俺はこの世界の知識がまるでない。当然あんな化け物共についてもこの世界の人間についても……。

「まあ、教える代わりに継げとは言わん。話を聞け。」

……ただ教えてもらえるのはありがたい。ただ程怖いものはないとも言うが……。

「座れ、座れ。」

そう言つて魔王は再び隣を叩く。俺はメリットデメリットを即座に考え、座った。

「いいか、この世界には魔物というのがいる。まあこれはお前が殺していたゴブリン共が該当する。」

あれ本当にゴブリンだったんだ。

「魔物は総じて知能が低い。なかには人間以上の知恵を持つものがあるがそんなのは稀だし。自ら無駄な戦闘というのは行わない……」

たぶん。」

こいつが一気に信用できなくなった。

「我らは姿は魔物に似てるがれっきとした魔族という生き物じゃ。」

ふむふむ、翼、角、牙があるやつは魔族＝信用できない、と。

「今変なことを考えなかったかのう？」

「気のせいだろう。で、他は？」

「まあ、種族は他にもあるが面倒くさいから先に他の説明じゃ。」

グダグダ過ぎんだろこいつ。俺は深いため息を吐く。

「この世界には魔法というものがあつての。それぞれ炎、水、風、大地、闇、といったものがあるのう。因みに魔王は全ての属性が使えるんじゃ。」

「あ？じゃあ、他の奴は全部は使えないのか？」

「うむ、複数使える者はいるが全ては無理じゃ。」

魔王はそう言って言葉を区切る。

「そもそも、魔法には今の以外にも呪い、聖、召喚、無、と様々なものがあるからのう。」

「ふん。」

面倒くさいなそりゃ。

「あとは魔導具とってのう。魔法でも実現不可能なことを可能にするアイテムがあつての。それぞれランク分けされておる。」

魔王はそう言つと溜息を吐く。

「他にも色々あつてのう。正直説明すんのは面倒くさいんじゃ。」

ぶつちやけんじゃねえ。

「と、言つわけでの？主に直接この世界の知識、魔法の扱い方、や魔力を叩き込もうと思つての。」

魔王はそう言つて俺の頭を掴む。俺は逃げることも許されずに押さえつけられる。そして流れ込んでくる知識。それは激痛となつて俺を襲つ。

「ぐっ……が……ぎぎぎぎぎ！！あ、たまがあ！！！！つう……
つてええええええ！！！！！！」

頭が割るような痛み。俺は我慢できずに頭を抑えて地面をのたうち回る。

「がああああああ！！！！痛い痛いいたい痛いイタイイタイイタイ
イタイイタイイタイ！！！！！！」

俺は思わず叫んだ。魔王が何か言っているがそれすらも耳には入ってこない。鼻からも血が流れ出てくる。やがてその痛みに耐え切れ

なくなった俺は再び闇の中へと落ちていった。

殺人鬼はRPGのラスボスに挑戦したようです（後書き）

感想、批判、ご意見があったらどうぞ送ってください。

どんな奴でも絶対に驚かないなんてことはないそれは殺人鬼も例外じゃなかった

「友に秘密を知られたら？何が何でも口を封じるの……一部を除いて。」

b y 魔王

どんな奴でも絶対に驚かないなんてことはないそれは殺人鬼も例外じゃなかった

Good morning 太陽。今日ほどお前を消したいと思っ
た日はねえよ。昨日俺が魔王に流し込まれた知識。俺が意識を失っ
ても激痛で再び意識を覚醒させてきやがった。意識を失っては激痛
で目が覚める。地獄のような時間だったぞ。ようやく治まった頃
はもう日の出だ。・・・あの魔王死ね。

「・・・・・・・・・・。」

実際俺はもう口を開く気力すらない。思考は正常だが如何せん体を
動かす気にはならん。耳を澄ますが俺の他に動いている音はしない
から魔王は何処かへ行っているのだろう。これで放置と言ったら
絶対にあいつを殺す。・・・しかし

くう

俺の腹はまだまだ気力があるようだ。こんだけ元気に空腹を訴えて
るのだから。

「・・・・・・・・・・起きよう。」

日が地平線から完全に出た頃。俺はようやく気力が戻ってきた。

「^{あれ}激痛で体力を相当もってかれたし服も血塗れになっちまった。」

おまけに顔も血塗れだ。不快で堪んない。俺はまだ動きたくない

いう体に鞭を打って立ち上がる。そこで初めて周囲の様子に気づいた。

「・・・・・・・・何処だ此処。」

俺の背後に広がっているのは鬱蒼とした森、ここは最初とそこまで違いはないが問題は前。俺の眼下に湖が広がっている。そう眼下、つまり俺は今上から湖を見ていることになる。今、俺がいる場所は湖より遥かに高い崖の上だった。

「魔王がやったのか？」

俺は一步前に出ようとしてバランスを崩す。

「・・・・・・・・貧血か？」

顔面は見えないが服には大量の血液が乾きこびりついている。良く俺死ななかつたな。自分の運に感謝しつつ俺は鬱蒼とした森の中に入ってしまった。

「・・・・・・・・あやつは生きてるかのう。」

僕は小さな湖の辺で呟く。やれる限りのことはしたし回復もこまめに行なった。これで死ぬ確率は低いじやろうが絶対ではない。

「後継者を死なすのはもったいないからのう。」

あれがただの馬鹿だったら助けようなどとは思わんし継がせる気も

ない。そんなことをしたら僕は恥を晒すことになるからう。

「……………しかしこの姿も疲れたのう。」

老人も嫌じゃったが。この姿はごつくて気持ち悪いからのう。威厳は出るんじゃないが…………。

「やはりこれが一番だのう。」

我はそう言つて元の姿に戻る。うむ、やはりこの姿が一番じゃ。我はそう言つて服を脱ぎ湖へと入ろうとし

「おい、ま……………おう？」

その声に思わず我は後ろを振り向く。そこには昨日助けた人間の姿。ヤバイヤバイヤバイ。この姿を、女の姿を見られた！？……………しかも裸。

森の中を歩いていたら俺は途中で見つけた小川を辿っていた。たぶんこの水があ湖に繋がっているんだろう。

やがて小川の先に小さな湖が見えてくる。あのでかいやつ程じゃないが十分だ。俺はその湖へ歩いていくと丁度足を水に浸している魔王がいた。

「あ？」

俺が声を掛けようとするとう魔王の姿が突然ぶれる。その現象に少し驚きながらも俺は近づこうとすると

「おい、ま」

「やはりこれが一番じゃ。」

美女が現れた。

「・・・おう？」

その姿を見て俺は今まで見てた魔王は実は幻なのではないかと思っ
た。だってあれだぜ？あの敵つい面して牙生やして翼生やした奴だ
ぜ？それがいつの間にか美女になるって・・・。

俺はその場で頭を抱えながらとうとうイかれたのかと考えていると
先程の美女が声を掛けてくる。

「死ね！！」

「うおっ！？」

突然、美女は俺へと飛び掛ってくる。思わず反射的に俺は転がって
その場から逃げた。つつか服着ろ、服！！美女は裸を見られたのが
余程ショックだったのか涙目になりながら俺を追撃しようとする。

しかし、あれだ。いいね。美しいとしか言いようがないプロポーシ
ョン。それに絹のように美しい黒髪。そして宝石のように輝く紫の
瞳。それを見た俺は笑を浮かべる。

いいね、どうしても切りたくなっちゃうじゃねえか。俺はデザート
イーグルとナイフを構えると目の前にいる美女へ駆ける。

「ふん！生かそうかと思ったが！！我の姿を見て生きてられると思
うなよ！！し、しかも、は、はだ、裸まで見るとは！？継承などと

うでもいい！！ここで殺してやる！！？」

美女・・・というか魔王なのか？は顔を湯気が出るくらい赤く染め俺に腕を振るう。食らってしまえば消し飛ぶような威力。だが、まだ混乱しているのかその一撃は隙だらけで――

「フツ――」

俺は紙一重でその攻撃を躲すと魔王（仮）の首を掴み木に叩きつける。

「がつ！？」

その衝撃に魔王（仮）は咳き込み俺を睨む。だが殺すことは出来ないだろう。殺ろうと思えば今すぐにでも俺は魔王の首を切り裂ける。俺より魔王が死ぬほうがどう考えても早い。

「お前魔王なのか？」

「当たり前だ！！」

あ、マジで魔王なんだ。

「で、何でそんな姿になってんだ？つか初だなお前。」

「これが私の本当の姿だ！！！そ、それにあ、当たり前だろう・・・。」

魔王は叫ぶが徐々にその声は小さくなっていく。

「は、裸を、み、見られたんだから。」

魔王は顔をさらに赤くし涙目で言う。・・・止めてくれ、凄いい切りたくなってくる。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

魔王も俺も黙り込む。・・・このまま掴んでも埒が明かない。俺は掴んでいた手を離すと魔王にコートを着せる。俺の服で唯一血の被害から逃れていたものだ。多分魔王が脱がしたんだろう。

「取り敢えずこれでも着とけ。話はそれから聞く。」

「・・・・・・・・・・。」

魔王は俺をじつと見る。おい、我慢してんだからそんな目で見るなとつと服を着ろ。

「・・・・・・・・ありがとう。」

魔王はそう言うのと湖に置いてある服に着替えに行く。いや、体でも洗うのか？

俺は取り敢えず魔王を見ずにさっきの衝動をぶつけるように木に向けてデザートイーグルの引金を引いていく。そもそも印象変わりすぎだ。前の敵つい状態なら文句で何でも言えるがその状態だと俺がみつともないように見える。傍から見たら俺が虐めているようにしか見えないしな。世間の価値観ならあの魔王の姿（美女）は間違はなく美しいとか綺麗と言えるだろう。それもとびっきりの上玉と。

まあ、俺も男だ。そんなものの裸を見ちまったら……切りたくなるだろう？え、ならない？

まあ、ともかく元々言おうと思ってた文句も言えなくなっちまうんだよね。

「……………腹減ったな。」

俺がマガジンに入っていた銃弾を全て撃ち終わり新しくマガジンをセットしていると丁度魔王がやってきた。

「……………すまない。」

何への謝罪かは分からないが俺は無言で渡されたコートを取る。

「構わない。というか俺も服を洗いたいから向こうでいいか？」

俺は魔王の返事も聞かずに湖へと歩いていく。後ろから足音がするからついて来ているのだろう。俺が湖で服を脱いで洗いだすと魔王が隣に座る。

「怒らないのか？我はお前を殺そうとしたのだぞ？」

「別に。むしろ俺の方がすまなかった。」

命を狙われるのは慣れてる。今まで散々殺してきたんだ。当然その分恨まれるし命だって狙われる。裸を見られて襲ってきたってことは此奴にとっては重要なことだったんだろう。だったら狙われるようなことをした俺が悪かったのだろう。俺が謝ったことを意外に思ったのか魔王は驚いた様子で俺を見る。

「い、いや。我の方が悪かった。」

魔王は慌てたように謝る。・・・こいつ本当に魔王か？マジで印象が違うんだが。俺は内心でそう訝しがりながら魔王に気になっていたことを聞いた。

「で、何であんな姿になってたんだ？」

別にずっとあの姿でいる必要などないだろう。

「だって、あの姿の方が威厳があるし、それに魔王として舐められないだろう。」

・・・成程。ようはあの姿の方が魔王っぽいと。けど・・・

「その姿でも十分過ぎるほどのカリスマを感じるんだが。」

何というか。正直厳つい姿の時よりも俺はビビった。感じる力も迫力もこの姿の方が凄かったしさっきの一撃も冷や汗が止まらなかったからな。俺の言葉に魔王は僅かに顔を上げる。

「・・・・・・・・本当か？」

「ああ、とんでもないほど感じた。」

今の落ち込んでる姿からは全く感じないがな。そんなことを言つてこれ以上落ち込まれるのも面倒くさいから言いはしないが。魔王は俺の言葉を聞いてブツブツ言いながら頷く。あ、くそ。流石にスポンは落ちねえよなあ。服も血がこびり付いて落ちねえよ。俺は傍に置いておいた鞆からシャツを取り出し着替える。

「よし!!」

「あ？」

俺が着替え終わると魔王は勢いよく立ち上がる。そして目を輝かせながら俺を見る。……今度はなんだ？

「人間よ！私もついて行くぞ!!」

「は？」

此奴何つつたよ。ついて行く？俺に？

「うむ、主には世話になったしの！それに主には教えねばならぬことがあるからの!!」

魔王はそう言つて俺に飛びついてくる。やめろ！離せ鬱陶しい!!

「人間よ、主の名前は何というのだ？」

魔王は離れると小首を傾げながら聞いてくる。たぶん文句言つても此奴は聞かないのだろう。昨日と今日で何となく此奴のことは分かつてきたし……認めたくないが。

「響夜、鳴神響夜だ。」

「うむ、我の名前はマオ。マオ・オメテオトル・ヘーラー。マオと呼ぶがいい!」

そう言つて魔王、マオは手を差し出す。取り敢えずはまだ世話になることもあるんだ。俺はそう考えて差し出されたマオの手を握りつつた。

「よろしくな響夜!!」

「ああ、よろしく。」

これがこれからも続いていく殺人鬼と魔王の出会いだった。

あの後から暫く経ち今俺達は焚き火を挟んで向かい合つて話している。

「いいか、響夜。知識を与えたから大体のことは分かるはずだ。まずは魔法の属性についてだ。言つてみるがいい。」

なんとという高圧的な態度。いや、教えてもらうのは俺だから強くも言えないが

「あゝ、炎、水、風、大地、闇、聖、呪、無、空、時、だっけか。」

「ああ。魔法が使えない者もいるが大抵は少なくとも初級の魔法は使えるな。」

「で、俺の魔法ってのは？」

「うむ、それだがの・・・まあ何というか。我は主と繋がっておるから分かるのじゃが。」

「？」

マオは少し難しい顔をする。俺はマオのその様子に首を傾げた。

「主が扱えるのは炎、呪、空の三つじゃ。」

「炎は一般的だっけか。で、空はレアなので……。」

「呪を使えるという者はいないと言っても過言じゃなの。」

「何でだ？」

俺が与えられた知識の中には呪については能力の特徴だけでそんな情報はなかった。

「呪は使えるものは相当限られるんじゃ。まず上手く操れなかったら自分にその反動が返ってくるし、それが使えるのは余程の罪深きものや恨みなどがあるものじゃからな。」

それも大抵操れずに自滅するんじゃが。とマオは言う。

「しかし、主にはピッタリかもしれんな。」

マオはそう言って笑う。それは厳ついときのような豪快な笑いではなく女らしい……お淑やかとでも言えば良いのだろうか。そんな笑いだった。

その姿を見ながら俺はずっと疑問に思ってたことをマオに聞く。

「なあ、俺の手にあるのは何なんだ？」

そう、俺の手の甲。そこにはよく分からない刺青がはいっていた。翼を生やした・・・これは天使だろうか。一本の剣を両手に地面に突き立てるように持つ天使の上半身の姿だった。それは黒く描かれていることから墮天使のようにも感じる。

「・・・・それは・・・あれじゃ。」

それを見たマ才は歯切れが悪くなる。

「あれって何だ。」

「その・・・我との契約の証じゃ。」

「証？」

魔力を受け取った時のか？

「うむ、我が死んだとき主は我の代わりに魔王になるという魔王の後継者としての証じゃ。」

「・・・・・・は？」

「だから魔王の後継者の「ちょっと待て、お前これいつやった。」・・・知識と魔力を与える時じゃ。」

「巫山戯んな！お前シャレになんねえぞ！！」

「良いではないか！魔王になれば最強ともいえる力と全ての属性を使うことができるのじゃぞ！！それにその紋章は我を召喚すること

も出来るし、制限があるとはいえ通信も可能にするのじゃぞ!!」

「そういう問題じゃねえ!!」

畜生やられた! やっぱりタダより高いものはねえのかよ!!?

「…………ハア。」

「そう落ち込むでない。それに知識と魔力を与える以上それはどうしても必要なんじゃ。」

「……………」

「そ、それにあれじゃ、ええと別に、我を殺さなくとも婿になれば……じゃなくて!! ある意味主は家族以上の繋がり……でもなくて…………」

マオ、必死に弁解しようとしてるが話がどんどん変わっているぞ。俺はその衝撃の事実に凹む。そんなものになったら敵ばっか増えて休む日すらなくなんじゃない? 殺人鬼だって休みたい日はあるんだぞ?

「……………寝よう。」

俺はそう言っただけになる。何かマオが慌ててたがんなもん知らん。やがてマオも寝ることにしたのか。静かになった。聞こえてくるのは木々がや草花が風で揺られる音と火が枝を燃やす音だけだった。不思議といつもよりも静寂が心地よく感じた。

「……………響夜。」

「・・・・・・・・。」

「すまなかった。勝手にそんなことをして。」

マオの声は少しだけ震えていた。俺はその声を聞いて静かに溜息を吐く。本当に此奴は・・・・・・・・。

「構わねえよ。こんな結果になったとはいえ、魔力といい知識といい世話になったからな。」

実際もしマオ以外の奴らに出会っていたらこんな素直に話が通じたかどうか分からねんだ。その点でいえばメリットの方が遥かに大きい。

「だから謝んじゃねえよ。」

「・・・・・・・・ありがとう。」

俺はマオのその声を聞きながら眠りについた。

「・・・・・・・・。」

まだ日の出か。俺は太陽の光を感じながら起きようとし、動けなかった。

「・・・・・・・・。」

俺にしがみついているマオ。心無しか随分心地よさそうに寝ている。

「・・・・・・・・マオ。」

俺はしがみついてくるマオの肩を揺らす。だがマオは離れるどころか逆に力いっぱい俺の胴体を締め付ける。

「——ッ」

い、痛い。仮りに魔王。なかなかの力だ。普段から力は抑えているのだろ。でなかったら俺の肉体など即座に潰れちまう。

「ま、マオ・・・起きろ。おい、マオ。」

俺は少し強くマオの肩を揺らす。早くしろこのままだと潰れるから！

「・・・・・・・・。」

俺の祈りが通じたのかマオはもぞもぞと動く。薄く目を開ける。

「おい、目を覚ませ。」

「・・・・・・・・ふわ・・・響・夜・・・おはよう。」

そう言っ俺から離れるマオ。助かった。なんとか俺の胴体はまっぶたつにならなくて済む。俺は内心でホッとしつつ起きようとする。

「・・・・・・・・ん。」

起きようとする俺にキスをしてくるマオ。・・・・・・・・What？
その突然の行動に思わず思考が停止する。

触れ合う唇。触れ合っているほんの数秒がまるで何時間のように感じる。

「・・・・・・・・・・。」

やがて唇が離れると共にマオは再び眠り出す。先程の光景に呆然とする俺。いや、別にキスが初めてなのだから言うわけじゃない。ただ会ってそこまで経たない奴に突然されたことは初めてだ。やがて意識が戻ってくる俺。マオの顔を見るがマオはまた心地よさそうに寝てるだけだった。

「・・・・・・・・・・意味わからん。」

寝ぼけてたのか？俺は取り敢えず起き上がり荷物から朝食の準備をする。マオがいる分量も多いからな。やがて起きたマオは何もなかったかのようにまたはしゃいでいた。きっとあれは寝ぼけてやったのだろう。

俺はそう結論づけ荷物を整理するとマオと共にこの世界に来て初めての旅に出た。

マオがやけに元気だったのは余談だ。

どんな奴でも絶対に驚かないなんてことはないそれは殺人鬼も例外じゃなかった

感想、批判、ご意見があったらどうぞお願いします。

殺人鬼から見てもとても魔王には見えん（前書き）

「無性に切り殺したくなることってあるよね？」

b y 響夜

「我を見てそんなこと言うでない!!」

b y マオ

殺人鬼から見てもとも魔王には見えん

この世界にはスキルつてのがあるらしい。何でも通常^{ノーマル}スキル、特殊^{レア}スキル、固有^{ユニーク}スキルつてのがあるらしい。右へいくほど珍しくその力も協力になるとか・・・。

何故突然こんなことを言ったのかそれは俺のスキルが分かったからだ。

固有スキル：想像形成

固有スキル：魔神の観察眼

固有スキル：鬼神の武勇伝

特殊スキル：魔王の加護

通常スキル：属性付加

つてのが俺のスキルらしい。上から説明していくと想像形成つてのは想像したものを魔力で創るつてもものらしい。ただしイメージが明確でない^と形があやふやになったり効果も小さくなるようだ。で、魔神の観察眼つてのは俺の殺人鬼としての能力、対象の筋肉の動きや体の構造が分かるらしい。鬼神の武勇伝は俺の身体能力のことだと思う。持ち主の能力をすべて底上げするらしい。魔王の加護は言うまでもなくマオが俺につけた後継者として証のせいだ。いちおう能力増強やら回復力増強の効果があるらしい。で、属性付加は持ち主の属性を武器やらに纏わせることが可能らしい。

スキルつてのは経験で獲得するのもあれば最初からもっているもの、

あとは魔導具や神器で得られたりとか・・・。

そうそう神器ってのは魔導具のさらに上らしい。何でも神が作ったもので誰も造ることが出来ないものだとか・・・。これには特殊型と形状型しかなくマオ曰く

「神の創ったものに人間が格をつけるなどおこがましいと思ったのじゃろう。」

とのこと。

ま、これは俺が生きる上での知識の確認といったところだ。

「響夜。まだなのか？」

俺達は今山の上を登っている。マオは知識を与える際に俺に不要だと思ったものは与えなかったらしくこの世界にはまだまだ知らないことがあった。例えば村や街の情報、魔物についてなんてのはマオは何を考えたのか俺に与えなかった。

「うるせえよ。だったら自分で歩け。」

マオはずっと本来の姿のままだが黒いドレス(?)しか持っていないらしく歩きづらいついかほざき俺が背負っている。山の中をドレスとか此奴は何を考えてやる。

「む、響夜。」

「分かってる。」

俺のスキルと普段から鍛え上げている聴覚は近付いてくる敵の足音を察知していた。俺は背負っていたマオを降ろす。それと同時に現れる魔物。虎、いや狼・・だろうか。額には一本の紅い角を生やし虎のような牙に狼のような体躯ただその大きさは恐らく4、5m程もあるだろう。その体は見るからに強靱で、恐らく銃は効かないだろう。

「気を付けるのだぞ響夜。あれはゴブリンどもより遥かに強いぞ。」
「あいよ。」

丁度良い。此奴で魔法つてのを試してやるか。俺は魔物の注意を引き付けながらマオから離れる。

「遊ぼうぜ猫スケ。まあ人語を理解できるのかは知らねえが。」

俺は魔物を試しにナイフで切り付ける。だがやはりその体に傷を付けることは出来ず魔物は自らの力を誇示するかのように吠える。うるせえんだよ。耳がいてえだろうが。取り敢えず注意は引き付けたので良しとする。

「集中・・・集中・・。」

「力とは支配するもの。」マオはそう言っていた。魔力を俺の意思通りに操り構成する。

「形成・・・呪・・・炎・・・空。」

三つの魔法と想像形成、属性攻撃を使う。想像形成で形を創る。そ

れに呪の属性を付加させる。さらにそれに炎の属性を被せて付加させる。あとはそれを空の魔法で操る。

「地獄車。」

ま、こんな感じが。空中に現れたのは刺を生やした二つの車輪。呪で癒せない傷をつけるという呪いを付け炎で車輪を包む。あとは空でそれを俺の意思で操る。空を使わずともできるが此方の方が敵の攻撃を躲せる。

「殺れ。」

あとはそれを放つだけ。車輪は目の前にいる魔物へと向かう。魔物はその車輪を迎撃しようとする。だが二つの車輪は魔物を挟撃するように立ち回る為魔物は必ずどちらかの攻撃を受けていく。魔物に刻まれていく傷跡そして傷は徐々に増えていき。

「・・・ガア・・・。」

魔物はもはや虫の息と言ってもいい状態だった。俺は懷からデザートイグルを取り出す。確かに只の銃では傷付けられない。・・・なら魔法での銃ならどうよ。

「・・・。」

俺は銃弾を想像形成で構造を組み換え呪の属性を付加させる。そしてその銃弾を魔物に向けて放つ。放たれた銃弾は車輪に注目していた魔物に当たり。・・・爆発した。

「・・・これは中々良いものだな。」

俺はその結果に満足し車輪を消す。魔物の腹は爆発で飛び散り。傷跡からは焼け焦げた匂いがする。俺はその死体を観察して効果範囲を把握しておく。次使うとき自分ごと巻き込まれたら堪ったもんじやない。

「随分と上手く扱えたの。」

マオは俺に近づいてそう言うてくる。

「まあな、何か創るときに重要なのは腕だ。この場合何かを創るってのは要は想像すればいいんだろ？」

今まで退屈を紛らわせるのに色々やってたんだ。これぐらいは何とかが出来る。

「ただ、魔力を少し使いすぎじゃな。あれぐらいなら其処まで魔力を使わなくとも出来るぞ。」

「そこはこれからの練習次第だろ？」

「まあ。我に頼るがいい！」

そう言うて胸を張るマオ。此奴は魔王よりも子供みたいな感じだな。

「・・・・・・・・。」

俺は騒いでるマオを無視して先へ進む。マオも俺の後を慌てて付いてきた。

「街はまだかのう。」

「お前知らねえのか？」

「詳しい土地など我は知らん。」

マオはやけに誇らしげに言う。・・・それは自慢にはならねえぞ。
俺は呆れながら先を歩いていく。

「響夜〜!!」

「うっ!？」

今何か人間が発するようなものじゃねえ言葉が出たがそれは無視だ。
突然マオが俺に首に手を回して抱きついてくる。首が、首が苦しい。
俺はこれ以上首が絞まる前にマオを支える。

「いきなり抱きついてくるんじゃないねえ！」

「良いではないか。歩くのが辛いんじゃない。」

マオは頬を膨らませて言う。何だ此奴は。俺はマオを背負いながら
山をさらに歩いていく。やがて森が広がり俺達は森から出た。

「・・・・・・・・・・。」

「お・・・・・・・・。」

マオは瞳を輝かせながら感嘆の声を上げる。俺も目の前に広がる光
景を見る。そこに広がっているのは太陽の光を受け輝く海。そして

そこには港と街が広がっている。街は中々大きく多くの建物が見える。

「ほら！行くぞ響夜！！」

マオは俺の手を掴んで引つ張る。

「おい、待てそんな急に走ったら――。」

「ひゃっ！」

俺が言おうと思ったら案の定はマオは転んでしまった。見ればドレスも破けてしまいマオは涙目になっている。

「・・・・ハア。」

泣きたいのはこっちだ。俺はコートを脱いでマオに渡す。

「ほれ、ついでに鞆の中の服やるからそれに着替える。」

こんな姿で街に行ったら絶対に目立つ。只でさえ此奴は容姿がいいんだ。余計に目立つちまう。マオは俺から衣類を受け取ると木の影へ入り着替える。

「・・・・何でこんな疲れなきやいけないんだ。」

俺は深い溜息を吐いて空を見上げる。ああ、太陽がうざってえ。

「・・・・・・・・でかいな。」

着替え終わったマオを連れて俺達は街に入った。こうやって街の中を見るとやはり此処が異世界なのだと実感させられる。周りには耳や尻尾を生やした獣人、翼や牙を生やした魔族、長い耳が特徴のエルフ、それに毛むくじらのドワーフ、人間もいる。皆やはり俺の世界とは違うものを着て鎧や、冒険者のような服装の奴もいる。その多くが武器を装備している。おそらくこれが知識の中にあつた冒険者って奴なのだろう。

「響夜！あれは何だ？」

マオは街の中は初めてなのかそこら中に目移りしている。これだけなら御令嬢とかで済むんだろう。

「あ？・・・・ありや街灯・・・・か？」

この世界に該当なんてあつたんだな。魔導具が何かで制御してるのか？ただその数も少なく恐らく限りがあるのだろう。

「・・・・・・・・。」

さつきからどうも視線が俺たちに来る。服装に問題があるんだろうが、こればかりは仕方がない。先ずは金をどうにかしないとな。

「マオ。お前は金持つてるか？」

俺はマオに聞く。ここでもってないと言ったら・・・・どうしようか。俺のスキルで創るか？

「一応持っているぞ!!」

元気よく言うマオを見て俺は負担が減ったことに内心喜んだ。

「そんじゃ先ずはお前の服を買うか。」

知識を与えられてなかったらこの世界の字なんて分かんねえし。硬貨の基準も良く分かんかっただろう。マオには一応感謝しねえとな。

「いいのか？」

「構わねえよ。」

不安そうに俺を見るマオの頭を撫でて言う。今更俺の迷惑とか考えんじゃねえ。

マオは撫でられたのが照れ臭かったのか少し俯いて顔を赤くする。

「そうと決まれば先ずは服屋か・・・。」

どこにあるのかな。俺とマオは人混みの中を歩きながら探す。

「きよ、響夜。」

「あ？ああ、悪い悪い。」

どうやらいつの間にか歩くペースが早くなっていたらしい。俺はマオとはぐれないよう歩くペースを落とし手を繋ぐ。

「響夜？」

「はぐれたら面倒臭いだろう。」

その行動を不思議そうに見てくるマオに俺は言う。何時の間にか随分お人好しになっちまったな。

「ほら探すぞ。」

「うむ！」

マオは満面の笑みで頷くと上機嫌で歩き出す。俺もその手を握りながらマオの隣を歩いて行った。

「〜」

満足そうな様子で歩くマオ。そして隣でマオの服を持ちながらぐったりとした様子で歩く俺。女の買物というものをどうやら甘く見ていたらしい。マオは真剣な顔をして何着も試着し俺や店員に感想を聞いたりし、納得したら新しいものを探し出す。それが何時間もある。

「・・・疲れた。」

もうとつとと宿を探して休もう。俺はそう考えてマオに言う。

「マオ、そろそろ宿を探すぞ。」

確かこれだけ買い物してもまだ余裕があったな。お前の一応ってど

れ位だ？

「うむ、何処がいいかのう。」

新発見だがマオの勘は異常なほどに当たる。服の時もそれを存分に発揮していたからな。

「むっ、響夜！あそこじゃ！！あの宿がいいぞ！！」

マオは元気よく俺に言う。マオの指さす方向を見ればそこには一軒の宿屋。外装もそこまで悪くなく混んでいるわけでもない。俺はその宿屋へと歩いていくマオの後ろについて行った。

「すみません。」

対人関係はマオでは不安があるので俺が人を呼ぶ。こういうところでは一応敬語を使うぞ？これで外に閉め出されたら堪ったもんじゃない。

「あら？お客さんかしら。」

俺の呼び声で一人の女性が奥から現れる。・・・若いな、20代つてところか。

「どうしました？」

俺がそんなことを考えていると目の前にいる女性は首を傾げる。

「ああ、いえ、美しいものですから。」

「あら、そんなまた。そんなこと言っても負けてあげませんよ?」

俺の言葉に女性は笑って答える。っち、ダメだったか。勿論そんなことを声に出して言うわけもな、俺は肩を竦めて微笑した。

「.....」

痛い。足を踏むなマオ。止めろ。マオは不機嫌そうな表情で俺の足を思い切り踏み付ける。

「あらあら、彼女さんが御立腹ですよ。」

女性はマオのそんな表情を見て笑った。いや、こっちらしたら全然笑えないんだけどさ。

「ははは、済みません。一部屋お願いしたいんですけど。」

「はい。どれ位の滞在になりますか?」

「あ.....」

決めてねえな。俺が悩んでいるのを見て女性は言った。

「決めてないなら取り敢えずだけで、後から延長することもできますよ?」

「あ、じゃあそれで。えつと取り敢えず十日間程。」

「三食お付きになさいますか?」

「あ、はい。」

「でしたら銀貨七枚になりますね。」

女性の言葉に俺はマオの持っていた硬貨を支払う。すると女性は差し出された硬貨を取り代わりに一つの鍵を差し出してきた。

「ではお部屋の鍵になります。」

俺はそれを受け取ると未だに不機嫌そうな顔をしたマオを連れて部屋へと向かった。

「おい、何でそんな怒ってるんだ？」

「ふん、響夜など床で寝ればいいのじゃ。」

マオは俺の質問に答えず手から鍵をひつたくと早々に部屋へと入っていく。

「……意味わかんねえし。」

俺はその行動に溜息を吐きながらも部屋へと入りマオの荷物を置く中はそのなりに広く、綺麗に掃除されていた。こう考えてみるとこの世界に來ての初めてまともな寝床だな。俺はベッドで横なろうと近づくと

「ふん！」

ベッドの上にマオが乗って邪魔してきやがった。俺はもう一つのベッドへと向かおうとするが

「おい。」

そのベッドは先ほど置いたはずの荷物で占領されていた。此奴魔法使いやがったな……。マオは相変わらず不機嫌そうな面をしぷいっと顔を背ける。俺はその行動にこの日何度目になるのかの溜息を吐くと壁を背にして床に座り込む。

「……………疲れた。」

今までの疲労のせいか目を瞑ると強烈な睡魔が俺を襲う。俺はその衝動に抗えず深い眠りに落ちていった。

殺人鬼から見てもとても魔王には見えん（後書き）

感想、批判、ご意見がありましたらどうぞ送ってください。

殺人鬼と魔王は色々と初めてのことに戸惑った（前書き）

「予想した通りの所だな。」

b y 響夜

「賑やかなのじゃ!!」

b y マオ

殺人鬼と魔王は色々と初めてのことに戸惑った

おはよ・・・太陽が見えねえ。目覚めて最初から躓くとは如何なものか。ちよつと太陽に文句を言いたくなった。余計な事を考えていたら俺の意識は完全に覚醒し大きな欠伸と共に起き上がろうとし、止まる。

「・・・・・・・・デジャブ。」

もういいよこのネタ。俺に抱き着いて眠っているマオ。お前は餓鬼か。そう思ってしまう俺は悪くはないだろう。

「・・・・・・・・ベッドがあるのに何故俺と同じ床で寝るんだか。」

寒いし硬いし良いことなんて一つもないぞ。それとも人肌が恋しいのか？俺はそんなことを考えながらマオを見る。

「安心しやがって・・・。」

もしこれが他の奴なら襲われていたかもしれないというのに。俺はそんなことを考えてマオの頬を引っ張る。

「・・・・・・・・柔け～。よく伸びるな。」

俺は柄にもなくマオの頬で遊ぶことに夢中になってしまっていた。思わずハッと意識を取り戻しながらも手はその行動を止めない。

「・・・・・・・・平和だな。」

よく考えればここまで平和に過ごせたことなんて一度もなかった。普段からヒトを殺し、恨まれ追われの俺に休息など一日あれば良い方だった。俺はそう考えマオを一瞥する。

「ホント・・・いい寝顔だよ。」

二度寝なんてのも良いか。俺はそう考えて横になる。不思議と睡魔はすぐに俺を襲い、俺はまた直ぐに眠りに落ちた。

「・・・・・・・・ん。」

もう朝か・・・？我は眩しい朝日を浴びながらその目を開く。しかし温かいな・・・。我はその温かさが心地好くとても起きる気にはならなかった。

「・・・・・・・・響夜？」

そういえばあやつは何処におるのじゃ？普段から我よりも早く起きている男の名を呼ぶ。しかしその声に答える返事はなく、ただ静寂だけが広がっている。・・・もしかして何処かに行ってしまった？そんなことを考えてしまった我は突然不安に襲われた。我の姿を知っても態度を変えず、励ましてくれる男。何だかんだと言いながらも我の頼みを聞いてくれる御人好しな男。あやつがいなくなるなど嫌じゃ！！眠気など吹き飛び我は堪らずに起き上がろうとし、止まった。

「・・・・・・・・響夜。」

目の前にあるのは先程まで考えていた男の顔。朝日を浴びながらその顔は心地好さそうだった。

「・・・・・・・・ハア。」

それを見た瞬間我は安堵する。それと同時にそれ程にこの男のことを想っていることに自分自身驚きを隠せなかった。

「・・・・・・・・。」

白髪赤眼というこの世界でも珍しい容姿の男。思わずその髪を撫でていると、そういえばこやつのことなど我は何も知らないということに気が付いた。

「・・・・・・・・殺人鬼のう。」

とてもではないが今のこやつ顔を見ているととてもそのようには見えない。・・・・・・・・戦闘中はそう思えるだけのものがあるが。現にこやつが我に襲ってきた時など、正に鬼気迫るものがあつた。我が人間に気後れするなど初めてのことじゃ。・・・・・・・・それだけこやつの実力が高いということなのかもしれないが。

閑話休題

兎に角我はこやつのことなど全く知らない。

「・・・・・・・・よし。」

こやつのことを本人に聞いてみよう。ただしその為には今よりもず

つと親密な間柄にならなくては。我はそう決心すると起き上がろうとする。

「・・・・・・・・・・。」

やはり無理じゃ。他の生物との触れ合いなど長らく感じなかったしこやつの心音は聞いてて落ち着く。我は再び響夜に抱きつくと目を瞑る。もう少しだけこの至福の時を感じたいと思いながら。

「・・・・・・・・・・。」

こんにちは太陽。今度はちゃんと見えたか。俺はそんなことを考えながら未だに抱き着いて寝ているマオを引き剥がす。今度は抵抗しなかったので良かった。もうあんなことは避けたいからな。

「・・・・・・・・・・腹減った。」

そういえば飯も付くんだったか。俺はそれを思い出すとシャツをとズボンを着替える。一応書置きを置いておくか。俺は部屋に備え付けてあった羊皮紙とペンを取ると書置きを残す。この世界の文字は初めて書くから少しぎこちないが問題はないだろう。マオから知識を貰って良かった。これならあの痛みと引換えだったとしても許容範囲内だ。俺は床に眠っているマオをベッドに運び部屋を出る。

「・・・・・・・・鍵はいいか。」

仮りにも魔王。何かあっても心配するのは相手の安否だろう。俺はそう結論づけ階段を降りて一回のバー（というか飲食店？）に顔を

出す。

「あら？今起きたのかしら？」

俺が降りると偶然にも昨日の受付の女性が丁度食器を運んでいた。

「あ、はい。少し疲れが溜まっていて。」

主に魔王の世話で。そんなことは口が裂けても言えるわけがなく俺は愛想よく笑って誤魔化する。

「あら、夜の方でかしら。」

この人は笑顔で何つつこと言ってんだ。俺はその言葉に思わず苦笑する。

「違いますよ。俺と彼女はそんな関係じゃありません。」

俺がそう言つと女性はふふふと笑う。

「ふふふ、そうでしたか。お似合いだったのでついそうなのかと。」

このヒト商売上手いなあ。などと考えながらも俺は再び苦笑する。

「それじゃお昼にしますか？」

「ええ、お願いします。」

俺は愛想よく笑って返事をする。女性もその言葉を聞いて厨房へと入っていった。

「・・・何か職でも探した方が良いのかねえ。」

俺はこれからのことを考えて頭を悩ませる。適当に街の外にいる奴らから路銀を筆記取るのも良いがそれだと来る日と来ない日があるから却下。だとすると何か依頼でも受けて働くかねえ。マオの知識にはそういうのがないから詳しくは分からない。

「・・・・・・・・どうするべきか。」

俺の横に置かれる水の入ったコップ。見ればさっきの女性が微笑みながら持ってきていた。

「どうぞ。」

「ああ、済みません。」

「いえいえ、それよりも何やら悩んでいるようですが。」

この店のことだとも思ったのか女性は少し心配そうな表情をする。

「いえ、ちょっとこれからについて――」

そこで俺は気付いた。このヒトに聞けばいいんじゃないかね？と

「すみません。何か良い働き場所ってありませんか？」

俺の言葉が意外だったのか女性は少しキョトンとする。

「働き場所、ですか？」

「ええ、何分旅人でして。今までは何とかなつてたんですがそろそろ路銀も尽きかけてきてしまひまして……。」

「冒険者ではなくてですか？」

「？ええ。」

俺は少し首を傾げる。

「ああ、いえ、その身のこなしというか、隙がないようだったので。」

「……この女性何者だ？いくら冒険者達が泊まるのが多いとはいえ隙とかつてのはそうそう分かるもんじゃねえだろ。」

「……まあ外は危険でしたから。それなりに実力がないと旅なんて出来ませんよ。」

取り敢えず怪しまれたくはないからな。俺は肩を竦めて答えた。女性も何処か納得したのか頷く。

「そうでしたか。……ああ、それで働ける場所ですよね？」

女性はそう言つて少し悩む仕草をする。

「……そうですね。やはり一番メジャーで簡単なのはギルドに冒険者として登録することじゃないでしょうか。」

「ギルド、ですか？」

「ええ、やはり依頼が普段から数多く来ますし、ランクが上がれば知名度や依頼の報酬も大きくなりますから。」

「……………ん。」

ギルドか……。まずはマオと相談した方が良いか。……………よく考えればあいつのことをここまで気に掛ける必要もないよな。

「有難うございます。連れと一緒に考えてみますよ。」

「ええ、頑張ってください。」

女性はそう言うのと厨房へと戻った。この宿は中々いいな。やはりマオの勘は伊達じゃない。俺はそう考えながらコップに手を伸ばす。

「きょ……や……!!」

「……………またうるせえのが。」

俺はその声に肩を落とす。

「五月蠅いぞマオ。」

俺は階段を騒々しく降りてくるマオを注意する。マオは俺の顔を見た途端に笑顔を見せる。そして俺に集まる視線（主に嫉妬6割殺意7割）。見た目だけなら美女なんですがねえ。俺は思わずため息を漏らす。

「響夜！酷いではないか！？昼食に行くなら何故我を起こさない！

「！」

「・・・あゝ？あんまりにも良い寝顔だったんでな。起こすのが忍びなかったんだ。」

俺は適当な言葉を口にしてその場を乗り切る。マオはまだ不服そうな表情をしていたがそれも一時、飯が運ばれてくればまた笑顔になるだろう。

「はい。出来ましたよ。」

マオの愚痴に適当に返事していると先程の女性が料理を運んでくる。

「済みません。」

「いえいえ、これが仕事ですから。」

俺は運ばれてきた料理をマオの前に持っていく。

「？」

「ほれ、先に食っとけ。」

「でも・・・。」

「文句言つな。」

「そうですよ。こういう時は素直に受け取らないと。」

女性の援護射撃にマオは料理に手を伸ばす。

「……………おいしい。」

「そう言ってくれると嬉しいです。では貴方の分も・・・」

女性はそう言って一礼すると再び厨房に戻った。

「……………いい人だな。」

「うむ、優しいのだ。」

流石にあのヒトは人として見るか。中々面白いしな。

「……………響夜も、ありがとう。」

「どういたしまして。」

頬を僅かに赤らめて言うマオ。だから切りたくなっちまうから止める。

「マオ、この後なんだが。」

「む?」

マオは手を止めて俺の話を聞く。

「ギルドって所に行ってみるぞ。」

「ギルド・・・ああ、冒険者の。」

「金は必要だからな。」

マオは納得したのか頷いて再び料理に手を伸ばす。俺はその様子を眺めながら自分の料理が来るのを待っていた。

あの後ロシエル——あの女性の名前だ。あの後聞いた——によるとギルドはすぐ近くにあるらしいので俺とマオは今ギルドに向かっていた。よく分かんがロシヤルから招待状を貰ったのでこれを渡せば良いらしい。ロシエル、お前はマジで何者だ？

「響夜！見えてきたぞ！！」

マオははしゃぎながらギルドを指差す。ここに来るまでも大変だった。マオの容姿が目立つから自然と人々の視線が集まる。そしてその視線は隣にいる俺にも向かうわけで……。切り殺したくなかった。

「あんまりはしゃぐな。」

俺はマオにそう言いながらギルドの扉を開ける。ギルドの中は沢山の種族の奴らがあり賑やかだった。真っ直ぐ受付を目指す俺たちに注がれる好奇の視線の数々。俺はこの世界じゃコートは外套として誤魔化せられるかもしれないがそれ以外は这个世界じゃないものだ。それにマオは貴族といった方が言いからな。いや、貴族じゃなくて王か。・・・一応。

俺はそんなことを考えながら受付嬢の下に行く。

「すみません。」

「はい、本日は当ギルドにどのような御用でしょうか？」

「実は冒険者として登録したいんですが、どうすればいいんでしょうか？」

「あ、はい。それでしたらこの用紙にお名前とご年齢、後は現在の住居の番号をどうぞ。」

住居の番号・・・要は住所か。

「済みません。招待状を貰ったんですが。」

俺はそう言つてロシエルから貰った招待状を渡す。受付嬢は差出人を見た後中に封筒されている手紙を取り出すと一言断つて奥へ入っていた。

「・・・・・・・・。」

「あれは何なんじゃろうな？」

マオはそう言つて受付嬢の入つていった扉を見る。いや、それはいいが。

「何故手を繋ぐ。」

俺はマオの行動に少し混乱していた。ここは混んではいい別にほぐれるような所ではないし何も手を繋ぐ必要はないだろう。

「良いではないか。」

そう言つて更に密着してくるマオ。止める暑苦しくなる。俺が露骨に嫌そうな顔をしてマオの接近を防いでいると奥から受付嬢が戻ってくる。

「済みません。」

「ああ、いえ。問題ありません。」

俺は外面で愛想良く笑う。

「実はギルドマスターに御会いしていただきたいんですが……。」

「……は？」

何？もしかしてマオが魔王だとバレたか？それともそれ以外で何かやっちゃったか？

「いえ、特に何か問題があったわけではないんですが。只あの招待状のことで……。」

ロシエル、テメエ何渡しやがった。俺はロシエルへの恨み言を吐きながら受付嬢の後を付いていきギルドマスターの元へと向かう。

「マスター。お連れしました。」

「うむ、入ってくれ。」

ドアの向こうから老人の言葉が聞こえる。受付嬢はドアを開け俺達

を招き入れると早々に出ていった。残された俺とマオの二人は取り敢えず椅子に腰掛けている老人をみる。

「む、主達が紹介にあった。」

「響夜です。」

「マオだ。」

「そんな畏まらなくとも良い。」

その一言で俺は敬語をやめる。

「そんじゃ、この口調でいかせてもらっわ。」

俺の態度の豹変ぶりにマスターは少し驚き声を上げて笑う。

「ホホホホ！！中々面白い奴じゃのう！」

老人は俺たちに席を勧める座ったのを見ると話し始める。

「まずはロシエルからの招待状じゃのう。あやつには所謂審査員というものをやってもらっているのじゃよ。」

「審査員？」

マオは首を傾げて言う。

「うむ、ギルドとして十分な実力があるであろう者たちを見定めるのじゃ。これは各宿屋に一人はいるのう。」

成程。どうりで身のこなしがどうか言ってたのか。

「それで大丈夫と判断されたものに招待状を渡すのじゃ。希望次第ではある程度のランクから始められるぞ?」

「・・・いや、最初から地道に進めていくから良い。」

「いいのか?」

「ああ。」

この世界の基準を図るのに良いし魔法の練習台になるからな。俺の隣でマオも頷く。どうやら俺に同意らしい。

「では、あとは受付嬢から聞いてそれで登録完了じゃ。それ以降はランクに応じた依頼が受けられるぞ。・・・そうそう、たまには僕からも頼むことがあるかもしれんからその時は頼むぞ?」

老人のその言葉を聞きながら俺達は部屋を出る。受付でギルドカードを貰うと俺達は依頼を探し始めた。

ランクにはE、Aがあり、その一つ上にS、SSとランクがある。Sというのは殆どいなくSSなどそれこそ両手で数えられるかどうからしい。

「響夜。これはどうじゃ?」

そう言っただけに見せてくるのは一枚の依頼書。そこに書かれているのはゴブリン達の討伐というものだった。

「数は・・・13か。」

まあ、練習だしな。俺が頷くとマオはそれを受付嬢に渡してきた。

「ほら！行くぞ響夜！！」

元気いっぱいと言うマオ。その様子を眺めながら俺も後に続いていく。こうして俺達の初めてのギルド生活が始まった。

殺人鬼と魔王は色々とお初めてのことに戸惑った（後書き）

感想、批判、ご意見があったらどうぞ送ってください。

殺人鬼に出来ず魔王に出来ること（前書き）

「・・・・あ、おもしれえ。最高にハイな気分だクソ野郎。」

b

y
響夜

「我の邪魔をするな!!」

b y
マオ

殺人鬼に出来ず魔王に出来ること

ギルドの依頼で俺達は今ゴブリンの討伐に来ている。そこまで苦戦することは無いと思うが油断すれば何があるか分からない。既に俺は此処に来てマオという規格外と会っているのだから。俺は適度な緊張感をもって目的の場所へと歩いて行く。・・・マオを背負つて。

「・・・・・・・・おかしいだろ。」

「何がじゃ？」

俺に背負われた状態でマオは首を傾げ聞いてくる。

「・・・・・・・・ハア。」

「？」

俺の様子にマオは相変わらず首を傾げたままだった。地面に落とすてやろうか？

「マオ。そろそろだから降りろ。」

「・・・・・・・・うむ。」

マオは少し不服そうな顔をしたが素直に俺から降りる。

「ゴブリンは穴の中にいるんだっけか。」

「うむ、奴らの住処は大体掘って作られた穴の中じゃ。狩りにでも行かない限りは大抵住処にいるの。」

俺達がそんなことを言いなが進んでいくと拓けた場所に出る。そこから見えるのは一つの大きな穴。・・・が5つ。

「・・・13、だよな？」

「・・・13・・・の筈じゃ。」

俺の言葉にマオも自信を失う。・・・だよな。あれ、どう見ても40は超えてるよな。俺達はゴブリン達の様子を見る。

「・・・？」

「どうしたのじゃ響夜？」

「いや・・・奥の方に何か建物が見えるからよ。」

俺の指さした方向。そこに見えるのは神殿のような建物。だが半壊して建物の殆どが土砂に埋まっていて生物が住んでいる様子もないし使われているようにも見えない。

「・・・。。。」

「響夜。気になるのは分かるが今はゴブリンが先じゃ。」

「ああ。」

俺は神殿からゴブリン達へと視線を戻す。ま、さっさとやるか。

「・・・・・・・・。」

俺のスキル想像形成。これはよく考えればこの世界の常識を覆すようなものだ。マオから聞いた。この世界は魔法を唱えるとき詠唱が必要になる。上位の奴らは詠唱破棄で無詠唱のまま魔法を使えるがそれも限度——マオのような規格外除く——がある。そして最初から存在している魔法に従った構成で魔法を放っている。だが俺の想像形成は詠唱を必要とせず俺の想像で創られるからこの世界には存在しないものだ。ようは・・・

「俺にしか創れないただ一つの魔法だ。」

俺は火の魔法で巨大な炎の蛇を創る。

「いつてこい。」

俺の合図と共にゴブリン達へ向かっていく。一匹のゴブリンがその姿を見て敵襲と悟るがもう遅い。目の前にいるゴブリン達を飲み込む。そこに来て漸く他のゴブリン達も動き出す。

「行くぞマオ。」

「うむ。」

炎の蛇によって焼け焦げた大地の上に俺達は降り立つ。

「中々のものじゃな。」

マオは周囲を見てそう呟く。

「まあな、今回は炎と追尾性だけにしたからな。」

俺達がそんなことを言っていると炎の蛇が突然凍り、砕け散る。

「……ゴブリンメイジ。」

「どれくらいだ？」

「身体能力はそれほどじゃないの。ただ知能が高く魔法が使えるの。」

身体能力がそこまでじゃねえんなら奴に魔法を撃たせなければいいか。俺はそう考えるとゴブリンの群れへと駆ける。

「半分任せた。」

「了解じゃ。」

その言葉と共にマオはゴブリンの群れへ次々に魔法を放つ。

「……容赦ねえな。」

天高く吹き飛ぶゴブリン達を見て俺は思わず同情してしまう。

「ギャギャッ!!」

「邪魔。」

飛び掛るゴブリンの顔面に拳を入れると横たわるゴブリンの頭を踵

落として砕く。広がっていく血の臭い、俺はその臭いで自分が興奮していくのが分かる。

「・・・堪んねえ。堪んねえよ。」

俺は懷からデザートイーグルを取り出す。

「オラオラオラア！！派手にブチまけろやぁ！！」

放たれた銃弾は針となってゴ布林達を襲う。だが俺がそれだけで終わりにする訳がない。針が刺さったゴ布林達は叫びだし次々に仲間を襲う。幻覚作用。それがこの針に掛けた呪の効果。仲間を未知の敵と錯覚させ混乱させる。仲間同士で殺し合うゴ布林。それを見た俺は思わず肩を震わせて爆笑する。

だからだろう、俺はゴ布林メイジからの攻撃に気付けなかった。

「――」

俺はその攻撃で手に持っていたデザートイーグルを弾かれる。そして同士打の中を抜けて俺に飛び掛ってきた5匹のゴ布林。

「――しまっ！」

俺はそう言っで左手に持った黒い塊をゴブリンの額に押し付ける。

「た訳ねえだろ？」

俺は笑いながらグロックの引金を引く。放たれた銃弾は眉間を撃ち抜き。俺は向かってきていたゴ布林共を次々に撃ち殺していく。

「ほらほらどうしたあ！？もつと死ぬ気で来いやあ！！」

俺は次々に倒れていくゴブリンを見て叫ぶ。

アイアンメイデン
「鋼鉄の処女」

その言葉と共にゴブリンメイジの背後に鋼鉄の拷問器具が出現する。ゴブリンメイジはそれに気付く暇すら無く中へと押し込まれ閉じ込められる。その瞬間ゴブリンメイジの絶叫と血が漏れ出だした。

「……………堪んねえ。」

俺はその光景を見て満面の笑みを浮かべる。最高だ。まさかこれも再現可能とは…………。

「……………つち、もう終わったか。」

辺りを見れば周囲にあるのは屍ばかりあと数匹程残っているがそれもやがては同士打で死ぬだろう。…………念には念を入れるか。

「燃やせ。」

俺は周囲一帯に炎の矢を降らせる。残りもこれで焼け死ぬだろう。俺はそれを確認するとマオを見る。

「……………まだ終わってないか。」

魔王つてのは滅多に戦えないのか？随分顔が輝いているが。

俺はそれを見ると気になっていた神殿へと足を運ぶ。何かありませんかねえ。

「しかし随分古びてるな。」

どれだけ昔のものなんだか。俺は何時でも戦闘が出来るようにグロツクとデザートイーグルを手に持っておく。

「玄関でも作るか。」

俺は崩れないように調節して弾丸を放つ。弾丸は神殿の外壁にぶつかる。と大体俺の予想通りの規模で爆発する。

「お邪魔しまーす。」

俺は出来た玄関を通して中へと入って行った。

「ふはははは！！逃げ回るがいい！！」

我は手当たり次第に近くにいる敵を吹き飛ばしていく。久しぶりに手加減無しで戦えるのだ。これぐらいは許してもらいたいものじゃ。

「さあ、次は何で吹き飛ばそうか。」

闇で影を操るのもいいの。自分の影に刺されて死ぬ姿というのは酷く滑稽であろうな。我はそう考えながら魔法を発動させる。だが――

「GYAAAAAAAAAAAAA!!!!!!」

「む？」

突然空から咆哮が聞こえる。そして突風が吹き荒れると共に聞こえる翼を羽ばたかせる音。

「G R A A A A A A ! ! !」

空を見ればそこには先程まではいなかったはずの——というかこんな所に現れないはずの——巨影。それは全身を覆う赤い鱗、二枚の翼、そして鋭い目付き。恐らく種としては代表格と言っても過言でない生物。

「レッド・ドラゴン
赤竜」

我はその姿を見て不敵な笑みを浮かべる。まさかこんな所で出会うとは……。

「……響夜は何処にいるのかのう。」

我は響夜の姿を探す。けれど何処を見ても響夜の姿はなくあるのはゴブリン共の死体だけ。

「む……置いてかれたかのう。」

我は証を使って響夜が何処にいるのか探す。……神殿？

「あやつ先に行きおつたな。」

我は頬を膨らませて言う。だがそれも束の間だった。

「もう一体ドラゴンの魔力を感じるの。」

感じるのは・・・神殿。響夜がいる場所も・・・神殿。

「不味い！」

幾ら響夜でも人間。それもこの世界に来たばかりでドラゴンと戦うなど無謀以外の何物でもない。我は真剣な表情になると目の前の赤竜を睨み付ける。

「悪いが、早々に死んでもらおうぞ。」

我はその言葉と同時に魔法を放った。

「オオオオオオオオオオ！！！！」

俺は目の前にいる化け物に弾丸の雨を浴びせる。だが化け物は多少怯んだものの俺へ突進してくる。

「クソっ！」

俺はその突進を何とか躲すと今度は背中へ弾丸の雨を浴びせる。だが化け物はその攻撃も物ともせずに俺を向く。そこで漸く俺は目の前にいるのが何なのか分かった。

「・・・竜・・・の骨？」

そこにいたのは全身が骨で出来ている竜の形をしたもの。肉や皮も

なく僅かに浮遊しているがその正体は分からない。

「GRUOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!!」

竜は吠えるとその口から黒い光線を放つ。

「うおっ!？」

その攻撃を何とか躲すものの俺の足場は崩れ身動きが取れなくなる。
竜はその俺に向かって右の爪で引き裂こうとする。

「――」

その攻撃を俺は全身を使って受け止める。その衝撃でピキッち嫌な音がするが今は構いやしねえ!!

「――ッ!」

竜の手を受け止めていた俺に突然衝撃がくる。

「…………ガッ…あ…。」

よろめきながら俺が見たものは尻尾。竜はその尻尾を使って俺を叩いたらしい。それにより体制を崩した俺を竜は一気に圧潰す。

「ぐ…………お…………。」

俺は想像形成でオブジェクトを竜と地面の間に創り出すと隙間から抜け出す。それとほぼ同時に竜はオブジェクトを破壊する。

「あ・・・ぶねえ。」

ひしゃげたオブジェクトを見て俺は冷や汗を拭う。今のは今まででもベスト5に入る程の恐ろしさだった。俺は鞆から手榴弾を取り出すと竜へと投げる。

ドゴオオン！！！！

手榴弾は見事に竜へぶつかり爆発した。俺は土煙の中にいる竜を睨み付ける。・・・流石に少しは傷が付いたよな？やがて土煙が晴れたそこには顔の半分を破壊された竜の顔。その瞳には確かな憤怒の色が見えていた。

「・・・ざまあ。」

俺は口元に笑みを浮かべて言う。それが気に障ったのか竜は尻尾で俺へと強烈な一撃を放つ。俺は躲そうとするが肩にはしまった激痛で動きが鈍る。

「——か、はっ！！！！」

その一瞬の隙を逃すことなく竜の尻尾が俺の腹に直撃する。骨の折れる嫌な音と共に俺はその衝撃で壁へ吹き飛ばされる。

「ゴボツ・・・」

壁に叩き付けられた俺は思わず咳き込む。口のなかには血の味が広がり床を赤く染めている。

「・・・舐めてんじゃねえぞ。」

俺はその痛みを無視して立ち上がる。

「ぜってえ殺してやるよ。」

俺は再び銃弾の雨を降らせる。今度は只の銃弾じゃねえぞ糞が！放たれた銃弾は次々にその効力を発揮する。あるものは爆発し、あるものは針となって竜を襲う。

「死ね死ね死ね死ね！！！」

俺の銃弾を浴びながらも竜はその闘志を燃やして突撃してくる。既に竜の体は半分近くがボロボロになり普通なら幾ら骨の体といってもとても動けるようには見えないだろう。

「……^{ファック}畜生。」

俺の体はもう動かねえ。最後の悪足掻きで引金を引き続けているがもうこの距離までこられたら倒しても俺に突っ込んでくるだろう。俺は最後に不敵な笑みを浮かべ竜に叩き潰された。

「……。。。。。」

体が……動かねえ。竜に叩き潰された後、俺は地下へと落下した。上からは勝ち誇ったような竜の咆哮が聞こえる。

「……けんじゃねえぞ。」

俺は気力で床を這い蹲って動く。

「・・・ヤロウ、絶対痛い目みしてやる。」

ぼんやりと俺が進む方向に二つの光が見える。

「・・・あ？・・・。」

俺は這い蹲りながらもその光がある台のへと上り、光に手を伸ばした。

「――」

その瞬間、俺は確かに何かを掴んだ。

「・・・十字架？」

俺が掴んだものは漆黒に輝く十字架。それは突然光だしやがて光が収まると共に十字架は消えていった。そしてその次の瞬間俺から溢れ出る何か。それは俺の全身を駆け巡りその効果を表した。

「・・・は？」

俺から消える痛み。みれば全身にあった傷も綺麗さっぱり消えていた。

「・・・。。。」

これは治ったと思って良いのか？俺は取り敢えず全身を確かめるように動かす。

「五体満足。・・・魔導具か何かか？」

後でマオに聞いておく必要があるな。俺は立ち上がると隣にあった台の上で光るものを見る。そこには一本の銀の鎖があった。

「・・・これも魔導具か？」

俺はそれへと手を伸ばす。するとさっきの十字架同様鎖も光だし今度は俺の右手に巻き付く。

「・・・。。。」

俺はスキルの魔神の観察眼を発動させる。これは鬼神の武勇伝と違い常時発動ではないからいちいち発動させる手間が掛かるのが面倒だ。

神器：悪魔の心臓 グリモア・ハート

神器：神殺しの鎖 グレイブニル

・・・神器ですか。もしかして上にいた竜ってのはこれの門番か何かか？

「・・・。。。。これはひどい。」

思わず効果を見た俺は頭を悩ませる。

悪魔の心臓 グリモア・ハート：所有者に超再生能力を身につける。肉体が一部でも残

つていれば再生を可能とする。

神殺しの鎖……^{グレイプニル}対象へと鎖を放つ。鎖は自由に操ることができ、本人の魔力の分だけ数を増やすことが可能。

神殺しの鎖——以降グレイプニル——は兎も角、悪魔の心臓——以降グリモア・ハート——って、俺強制的に人間止めさせられかけてる？これなんて呪い？

「……ジーザス。」

俺はそう言いながらも上へとグレイプニルは飛ばす。もしかしたらマオがどうにか出来るかもしれないからな。グレイプニルが天井に突き刺さると俺はそれを持って一気に壁を駆け上がる。

「よう、蜥蜴野郎。」

俺は目の前にいる竜に声を掛ける。竜は俺が生きていることにキレたのか。宝を取られたことにキレているのか知らないが一際大きく咆哮を上げる。俺はそれを見て笑った。

「上等。今の俺に勝てるもんなら殺ってみやがれ。」

「今の俺は……最高にハイな気分だぞ。」

その言葉と共に俺と竜の第二ラウンドが始まった。

殺人鬼に出来ず魔王に出来ること（後書き）

感想、批判、ご意見がありましたらどうぞ送ってください。

殺人鬼だって傷つく時はある……たぶん（前書き）

「……人間は止めたくなかったな。」

b y 響夜

「我から見れば主はまだ人間じゃ!!」

b y マオ

この程度の炎で！

「ハアツ！」

我は向かつてくる炎へ黒い閃光を放つ。それは向かつてくる炎を飲み込み赤竜へと迫っていく。赤竜もそれを見て無理だと悟ったのだろう、回避行動にでるがすぐそこまで迫っていた閃光を完全に躲せるわけもなく赤竜は脇腹を挟まれた。その痛みからか赤竜はこれまでもよりも一際大きな咆哮を上げると我へ次々に火炎弾を放つ。

「ふん！貴様程度で我を殺せると思うな！！」

我はそれを黒い閃光によって消し去る。竜もそれには警戒していたのだろう余裕をもって躲す。

「……無駄じゃ。」

だが竜は一つ勘違いをしていた。それは――

「我が連続で放てないとも思ってたか。」

我は竜の回避した場所へ次々に閃光を放つ。それは竜の体を次々に消し去っていく、やがて竜は塵すら残さずに消えていった。

ドガァン！！

その音を聞いた我が神殿を見れば外壁の一部が破壊されていた。そしてやがて聞こえてくる咆哮。気づけば我はその場所へと走っていた。

「・・・・・・・・！？」

だが我の行手を阻むように何体ものゴーレムが土から現れる。

「くっ！何故ゴーレムが！！」

こやつらは魔法使いが造るもので自然発生するようなものではない。
まさかあの神殿に魔法使いが！？

一瞬その考えが頭を過ぎったがその考えを放棄する。竜を従える魔法使いなど聞いたことがない。

「人形の分際で！」

我は目の前にいるゴーレム達を次々に泥へ還していくが数が多い。
奴等は再び泥から現れると此方へ殺到する。

「くっ、響夜が心配だというのに！」

我は目の前のゴーレム達に最大級の魔法を放った。

「・・・・・・・・。」

外が五月蠅い。マオはまだゴブリン共と遊んでるのか？

「GURROOOOOOOO！！！」

「おっと、悪いな。お前が先だった。」

俺は目の前にいる竜を見て笑う。

「出来る限り長持ちしてくれよ。・・・実験が出来なくなる。」

俺はその言葉と共に竜へと駆ける。竜はその右手を振り上げ俺を迎撃しようとするが――

「グレイブニル！」

その振り上げた右手に絡みつく何十本もの鎖。それは竜の動きを阻害し隙をつくる。

「オラァ!!」

さっきの戦闘。此奴は異常なまでの防御力を誇っている。恐らくそれが此奴の強みなんだろうが。

「至近距離の爆撃はどうだ？」

俺は想像形成で創り出したパンツァーファウストを竜の胴体へ放つ。それは奴の骨を砕き俺をも巻き込んで爆発した。

「――ッ」

俺を襲う火炎と激痛。俺の右腕は爆発に巻き込まれ吹き飛ぶが瞬時に再生した。それだけじゃない俺にあつた火傷の痛みも直ぐ様癒えていく。

「・・・やっぱり死なないか。」

恐らく俺の体は一瞬で全身を消し飛ばされない限り復活するのだろ
う。俺は自分の体を冷めた目で見る。

「・・・人間は止めたくなかったな。」

ポツリと呟く言葉。それは復活した竜の咆哮でかき消された。

「今遊んでやるよ。」

俺はそれを見て再び笑みを浮かべる。竜は俺へと勢いよく迫るがそ
う簡単に通すかよ。

「これでもちつと冷静になれや。」

俺は竜の頭上に何十個という巨大な石を創り奴の頭へ落下させる。
その衝撃によって奴は思わず頭を床へ打ち付け転がりながら止まっ
た。

「続いてはこれだ。」

俺は再びグロックとデザートイーグルを取り出す。奴は起き上がる
うとするがそれを俺はグレイプニルで出来なくした。

「俺は足が遅くてよ。皆に置いてかれちまうんだ。――――テ
メエもその苦しみを味わえ。」

俺はその言葉と共に銃弾を放つ。放たれた銃弾は竜の骨へ突き刺さ
っていく。すると竜は苦悶の声を上げた。見れば竜の周囲には紫色
の何か文字が書かれた帯状のものが幾重にも纏わり付いていた。

グレイプニルはその閃光を受け幾つかが損傷するが竜の四肢を拘束していく。

「G A A A A A A A A A A A ! ! !」

竜は神器が無理だと悟ったのか俺へとその狙いを変えて俺に閃光を放つ。だがその攻撃も俺の前方に展開されたグレイプニルによる壁で俺へ届くこともない。

「……ゲームは終了だ。」

俺は想像形成を発動する。

「恨みたけりや恨め。呪いたけりや呪え。毎晩毎晩俺の耳に呪詛でも届けろ。」

俺の手に形成される黒い球体。それを俺は奴へ向ける。

「その言葉が糧となり、お前の命が力となる。」

言霊。魔法を使う上で必要な詠唱、それに込められた想い。今の俺ではこれを創るのに只の想像だけでは届きはしないだろう。だから・
・殺人鬼^{おれ}の想いを言霊にする。

「黒聖槍の骸。」

球体は徐々にその形を変え。やがて漆黒の槍となる。俺はそれを投擲の構えをとり

「消え失せろ。」

放った。放たれた槍は黒い輝きを放ちながら竜へと刺さり

カシャアアン

砕けた。それと同時に竜に異常が起きた。竜を構成していた骨に亀裂が入り塵に変わっていく。

「GUGUAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

竜の咆哮も次第に小さくなっていき、やがてそこには何も残らなかつた。

「盛者必衰の理つてな。」

今の中にはその生物の持つ魔力の分だけその体を塵にする。という呪いが掛かっていった。効くかどうかも怪しかったが、何とか効いて良かった。実際あれはあそこで碎けるようには創っていなかったんだが・・・

「魔導具の生成ってのは難しいな。」

正確には神器に近い魔導具だが。俺が竜のいた場所を眺めていると

ドガァン！

「うおっ！」

突然壁が壊れへんてこな・・・ロボット？の様な物が飛び込んでくる。俺はその光景に呆然とし・・・

「・・・」ぶおっ！！」

よく分からない声を上げて潰された。そして誰かが飛び降りる音。

「響夜ー！！何処におるのじゃー！！！！！！」

・・・マオ、これはテメエがやったのか。俺は何とかロボットの様な物の下から抜け出すとマオを見る。

「響夜！無事じゃったのじゃな！！」

「テメエのせいで死ぬかと思つたわ。」

俺は笑顔のマオの頭を掴むと思ひ切り力を込める。

「痛い、痛い！痛いのじゃ響夜！」

マオは俺の手から抜け出すと頭を抑える。っち、これからだったのによ。

「で、テメエは今までずっとゴブリンと遊んでたのか？」

「いや、突然赤竜に襲われての。消し飛ばして響夜の下に行こうと思つたらゴーレム共が・・・。」

ゴーレムってのは多分あのロボットもどきだよな。・・・赤竜ってのはそのまま赤い竜か？

「響夜！ドラゴンはどうしたのじゃ！？」

「ああ、その骨か。」

「……骨？」

マオは首を傾げる。　　「というか何故それを知っている。」

「ああ、骨で出来た竜だ。」

「……多分それは骸竜がいりゅうじゃな。」

「骸竜？」

その言葉に俺は首を傾げる。

「うむ。死んで骨になった竜が空気中に漂うマナを大量に吸収してなるものじゃ。」

マナ……魔力の回復等の魔力の元になるものだけか。

「奴等は魔法の耐久が低い代わりに物理攻撃の耐久が他のドラゴンよりも高いのじゃ。」

「ふん。」

「で、そのドラゴンは？」

「殺した。」

「・・・・・・・・・・は？」

「いや、だから殺した。」

俺がそう言つとマオは俺に詰め寄ってくる。・・・顔が近い。

「ほ、ほんとに倒したのか!？」

「あ、ああ。」

その迫力に押され思わず俺は頷いた。

「だ、大丈夫じゃったのか!!？」

「・・・・・・・・死にかけて人間やめた。」

「？」

隠していてもいつかはバレる。だったら今のうちに言つといたほうが良いだろう。俺はそう思ってマオに神器も含めて今回のことを話した。

「・・・・・・・・大丈夫か？」

「ああ。」

マオに説明をしてどうにかしてグリモア・ハートを外せないか聞い

てみた。・・・そしてその結果が

「すまぬ。」

「お前が謝ることじゃねえよ。」

これだ。俺から神器を取り出すことは出来ず、やるには俺を殺すしかない。死にたくはないから当然の如くそれは却下。俺はこのまま半不死的な能力を得た。しかも下手をするとこれ、不老にもなるのではないかとの悪い知らせ付きで。

「まあ、死ななかつただけ良しとするか。」

あそこでこれがなかつたら俺は今此処にいないことになる。助かったのだから多少の不満は我慢するでしょう。

「・・・それじゃギルドに帰るぞ。」

「うむ。」

俺達は頷き合うとその場を離れようとする。鞆が消されたのは痛かった。あの中には色々入ってたんだが・・・俺は立ち上がり辺りを見回し・・・気付いた。

「・・・依頼達成の証拠どうしよう。」

「・・・あ。」

その言葉に立ち止まるマオ。ドラゴンたちは二匹とも消えちゃった。ゴーレムは持って行っても性がない。

「・・・・・・・・・・」

俺達はその後何とか依頼達成の証拠であるゴブリン13匹の片耳を探し出した。戦うよりも探すほうが疲れるってどういうことだよ。こうして俺達の初めての依頼はまさかの結果で終わった。

殺人鬼だって傷つく時はある・・・たぶん（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

殺人鬼は魔王に影響されたようです（前書き）

「・・・・・・・・勘弁してくれ。」

b y 響夜

殺人鬼は魔王に影響されたようです

あの竜というイレギュラーが出た初めての依頼から既に一週間が経とうとしていた。あの後帰ってきた俺達は色々と驚かれた。マオはそこまででないが俺は服が血塗れでコートやシャツもボロボロで服としての機能を果たしていない状況だった。それを見たギルドマスターと受付嬢が騒ぎ出したのだ。そのうえ帰ってきたら今度はロシエルが俺達を見て騒ぎ出す始末。依頼よりもよっぽど疲れた。

今は依頼も着実にこなしてランクも一つ上に上がった。それなりに平穏な日々でもあるだろう。窓から街の通りの様子を見れば相変わらずの喧騒が聞こえてくる。最初は慣れたと言っても多少の現実との違和感があったが今では此方の方が現実味が出てくるから不思議だ。それこそ俺のいた世界が夢であつたかのように。

「……………服でも買いに行くか。」

俺は読んでいた本を閉じてメガネを取る。このメガネ、書物などを読むとき時間を短縮するのによく重宝されているらしい。何でも思考が何時もより早く回転し読む速度が通常より3倍程の速さで読めるらしい。……………少し高かった。

「……………流石に二着は不味いよな。」

マオに貸していたものがあつたから何とか一着だけは残っていたがそれ以外は緊急用でギルドから貰った服だけだ。ギルドから貰ったのは堅苦しくて着てられない。

俺は取り敢えず財布の中の硬貨を確認する。…………よし問題ない。それだけ確認すると俺は部屋の扉を開け施錠する。マオは何処かに出掛けてるがまだ戻って来はしないだろう。

「先ずはギルドか。」

取り敢えずこの服返そう。俺は宿の階段を降りていく。

「あ、響夜さん。」

「・・・ロシエルか。」

俺は受付にいるロシエルから声を掛けられる。何か降りる度に此奴は此処にいる気がするが休憩もしてないのか？

俺は思わずそんなことを思ってしまったがそれを早々にやめて目の前にいるロシエルの話に集中する。

「マオちゃん。今日はご機嫌でしたよ？」

「あ？マオが笑顔なのは何時ものことだろう。」

俺は何時もの口調で話す。この一週間で此奴に丁寧な口調を使うのはやめた。というのもマオが此奴と仲良くなったことにより必然的に会話することが増えるのだ。御陰で俺は誰に対しても敬語を使うことは止めた。

「いえ、そうじゃなくて何か何時にも増して元気なんです。響夜さんが何かしたのかと思ってたんですが。」

「・・・ああ、多分今日は服の割引があるとか。」

ギルドに入ったからといって俺達にはまだそこまでの金銭的余裕はない。俺のメガネも他の物を買うのを我慢して購入したものだ。マ

オもそれを考えてなるべくセールのある日に買い物に出掛けてる。

「・・・そういえば。」

不意にロシエルの声が小さくなる。

「マオちゃんってやっぱり何処かの貴族なんですか？」

ああ、やっぱりこの質問はくるのか。だが素直に魔王と言える訳もない。俺は肩を竦めて言う。

「まさか、そんな訳ないだろう。」

「・・・ホントですか？」

「ああ。というかそんなに気にするんだったら本人に聞け。」

「いや、もしかしたら複雑な事情があるかもしれないじゃないですか。」

単に魔王が面倒臭いからです。

「そんなものあるかよ。」

俺はそう言ってロシエルに出掛ける旨を告げてギルドへ向かった。

「よっ。」

「ああ、響夜さん。」

俺は何時もの受付嬢に声を掛ける。

「今日も依頼ですか？」

「いや、この前借りた服を返しに来ただけだ。」

「あ、はい！分かりました。」

受付嬢は元気に返事をする。服を受け取る。

「……………」

俺はギルドの周囲を見渡す。何時も通りだが何処もおかしい、そんな感じがする。

「なあ。」

「？」

俺は受付嬢に声を掛ける。

「何っつーか。今日おかしくねえか？緊張してるといっつか浮き足立ってるっつーか。」

「…………ああ、今日は視察の日ですから。」

「視察？」

俺は何のことか分からず首を傾げる。

「はい、今日は戦乙女と千武ヴァルキュリア せんぶの二人が来るんです。」

「戦乙女と千武？」

「知らないんですか!？」

俺の言葉を聞いた受付嬢は驚いたように顔を近づける。・・・こりや失敗したか。

「いいですか？戦乙女っていうのは二つ名で本名はエルザ・アルリツヒゲン。『クラウン』の序列7位で凄く凛々しくて優しくて、本当に綺麗な人なんです！二つ名は彼女の戦う姿からそう呼ばれるようになったそうです！」

それで千武っていうのは同じく二つ名。此方は本名をガルラ・アルフレッドと言いまして今まで幾つもの戦場でたてた武勇からこう呼ばれるようになりました！！

二人とも凄く有名で！皆その二人が来るってもんですから大騒ぎですよ！！！！」

・・・ようはあれか。有名人を見て騒ぎ出すのと同じか。それより

「『クラウン』って何？」

「・・・ハア。」

俺の質問を聞いて受付嬢は呆れたように肩を落とす。どうやらもう驚く気力すらないようだ。

「いいですか？『クラウン』って言うのは国家や世界への貢献を認められて勲章を貰った人たちです。ただそれだけじゃなくて『クラウン』って言うのには13人がいて皆その力はSSクラスだそうです。後は『クラウン』の人達は基本的に世界中を旅していて全員が集合することなど滅多にはないそうですよ。……まあ国家や世界の代表ですかね。」

「……は。」

俺の間抜けな声を聞いて更に呆れる受付嬢。何だその目は文句はマオに言え。

「ま、ありがとよ。」

俺はそう言っただけで受付嬢との会話を終わるとギルドを後にする。こう考えるとマオが俺に渡した知識っていうのは本当に生きるのに必要な物の一部だということが分かる。自分でも確かめてみるということなのか？

「……そんな訳ないか。」

どうせその方が面白いからとかいう理由だろう。俺はそのまま服屋へと向かった。

「……。。。。。。。」

只今俺は街を全力疾走している。理由？

「コラ、その貴方！待ちなさい！！」

何か変な奴が追っ掛けてくるからだよ。何でこんなことになったのかは俺もよく分らん。服屋に行つて外套やらシャツに似た何かだかを買つた後、泣いている子供が五月蠅かつたから風船を想像して渡してたら何かエンカウト。そのまま横を通り過ぎようとしたら突然追い掛けてきた。以上。

「待ちなさいと言っているでしょう！！」

待てと言われて待つ奴は中々いないと思うぞ？俺はその声を無視して路地に入り込むと一気に家の屋根へ登る。

「・・・・面倒臭い。」

俺は後ろを振り返らずに走るが再びあの声が聞こえる。追い掛けてきたのかよ。

俺はその行動にうんざりしながらも走ることを止めない。やめたら絶対に面倒事があると俺の直感が告げている。

「・・・・・・。」

俺は後ろを確認しようとして振り向く。だがその首は横に来た瞬間に止まった。ここよりも離れた場所。ギリギリその顔が確認できる辺り。そこから俺に手を振っているマオの姿が見えた。

「・・・・・・ハア。」

それを見て俺は深いため息を吐く。・・何であいつはこんな厄介な時に。あいつがこっちに来たら間違ひなく面倒臭いことになる。そ

れだけは回避したい。

「すこし強行手段に出るぞ。」

悪いのは俺じゃない。悪いのは俺じゃないんだ。

「グレイプニル」

俺の言葉と共に背後にいる女性へ鎖が向かう。取り敢えず拘束した間に逃げよう。俺はそう決断して一気に加速する。だが――

「はっ――」

その声が聞こえたかと思うと俺の目の前に先程の女性が現れた。

「は？」

思わず間拔けな声を上げてしまった俺は後ろを振り返る。そこに先程まで俺を追いかけていた女性の姿はなく代わりにあるのは引き返してくるグレイプニルの姿。

「・・・・・・・・。」

何しやがった。俺は油断なく構えると魔神の観察眼を発動する。

「待ってください！貴方に聞きたいことがあるだけなんです！！」

「んな初対面の奴に怪しいこと言われてもな……。」

「・・・・・・・・。」

女性は自分に非があることは分かっているようで僅かに呻く。女性の動きにボニーテールが左右に揺られる。金髪碧眼。容姿も良く軍服に似た何かを着ている。

「・・・・・・・・。」

どうする。ここで時間を掛けるわけにはいかない。そうすれば厄介^マ事が近付いてくる。

「・・・・・・・・そんなじゃ。」

「あ、ちよっ！」

俺は一気に加速して屋根から勢いよく飛び降りる。常人なら何が起きたか分からずただ呆然とするだけだろう。俺は路地裏に着地すると通りから人の波に隠れてその場を後にした。

「響夜！」

宿の部屋の中。帰宅してきたマオは扉を開けると俺の名前を呼ぶ。

「何だ？」

俺は素知らぬ顔でマオに顔を向ける。

「・・・・・・・・。」

「・・・ご、こんにちは。」

マオの後ろにいる女性は申し訳なさそうに言う。俺は心の中で悟った。ああ、逃げてでも厄介事には無駄だったかと。

「響夜。我を置いていくとは何事じゃ。それにこの者は主に用があるというではないか。」

「・・・ハア。マオには負けたよ・・・うん。」

俺は今までにないほど疲れきった声で言う。

「うん？・・・そうかそうか！当たり前じゃ、響夜が我に勝てるわけなかるう！」

俺はその言葉を聞いてさらに溜息を吐く。

「・・・はあ、アンタもそこで突っ立ってないで座れ。」

ここまで来たらもう逃げられないんだ。俺は空いているベッドに座るよう促す。

「・・・あ、うん。ありがとう。」

女性はぎこちない様子で座る。俺は女性が座ったのを確認すると机の上にあったポットの中に入っている紅茶を想像形成で創り出したティーカップに注ぐ。

「ほれ。」

俺はそれをマオと女性の二人に差し出した。二人はそれを貰うと口を付ける。

「……美味しい。」

「相変わらず響夜の入れる紅茶は美味しいのじゃ。」

「……紅茶？」

マオの言った言葉を聞いたことがなかったのか女性は首を傾げる。

「ああ……まあ何というか俺の故郷の物だ。」

間違っではない。地球は一応俺の故郷だ。女性はもう一口飲むと顔をほころばせる。

「……で、何だ聞きたいことって。」

俺は目の前にいる女性に聞く。

「ああ、はい。私の名前はエルザ・アルリッヒゲンといいます。エルザと読んでください。」

「ああ、戦乙女さんね。」

「うっ!？」

その言葉を聞いたエルザは再び呻く。頬を若干赤くしながらエルザはコホンと調子を整える。

「その・・・その二つ名は出来れば遠慮して欲しいっていうか・・・あの本当に私はそんな大層な呼び名で呼ばれるような者じゃないので・・・。」

「・・・聞いた話と全然違うじゃねえか。凄いそわそわしてんぞ。マオはその名前を聞いたことがないのか首を傾げている。相変わらず世間に疎い奴である。」

「・・・で、エルザは何で俺なんかに？初対面だと思うが？」

「あ、はい。その実はあの子に風船をあげてるのを見て・・・。」

ああ、丁度泣いていた時か・・・。

「今の紅茶もそうですが、あの時貴方が突然手から風船を出していました。あれは誰から教わったんですか？」

「・・・そんなことのために俺は追い掛けられていたのか。」

「あれは俺のスキルだ。」

「・・・スキル。ですか？」

「ああ、言っておくが余り言い触らすなよ？バレると面倒臭いからな。」

マオの話を聞いてもこんなスキルはほぼ有り得ないとのことだしな。見ればエルザは何か考え込んでいるのかブツブツと呟いている。

「何の話をしているのじゃ？」

今まで会話に置いてかれたからかマオは俺の袖を引っ張って聞いてくる。美女がやる行動じゃねえな。世の中にはこれが良いと感じる奴もいるんだろうが残念ながら俺は特には感じん。強いて言えば切りたくなるだけだ。

「さあな。」

俺はその質問に首を傾げる。頬を膨らませるな、俺だって何のことなのか知らねえんだよ。

「結局何なんだ？」

俺はブツブツ言っているエルザに声を掛ける。するとエルザはハッとして俺達を見る。

「いえ、ただその能力と似たものを以前見たことがあるので・・・。

」

「あ？」

俺はその言葉に思わずマオを見る。どうやらマオも見たことはないらしく首を横に振った。

「あと、貴方からとてつもない量の魔力が漏れていたので気になってしまって・・・。」

「・・・・。」

え？魔力って漏れるの？

「俺のはマオから供給してるからな。そういうのはよく分らん。」

「供給って・・・。それには余程の魔力がないと出来ないんじゃない？」

「それが出来るからやってんだ。」

「・・・・・・。」

俺の言葉にエルザはマオを見る。まあ気持ちはわかる。此奴にそれだけの力があるとは思えないからな。現に今も頑張って美味しい紅茶を煎れられるように練習しているだけだし。

「でも一応魔力はある程度制御できるようにしたほうがいいですよ。でないとそれを狙って突然襲われることもあるかもしれません。」

「・・・・マジかあ。」

これ以上の面倒事とかマジ勘弁だ。俺の許容量は既に限界近いぜ？ 次何かあったら殺すかもしれないぜ？

「・・・・ええと、大丈夫ですか？」

俺は一度マオを見る。そしてエルザを見る。俺は交互に見る。決めた！

俺はエルザの手を強く握った。

「俺に魔力の使い方を教えてくれ！！」

マオに教わるとか無理！絶対碌なことにならない。エルザは突然のことに驚いたのか慌てる。

「頼む！お願い！この通り！！」

俺は頭を下げる。プライド？面倒事とプライド、どっちが重要だと思うよ。

「え、ええと・・・。」

女性は頬を赤くしながら視線を泳がせる。

「・・・は、はい。私で良かったら。」

「マジで！？」

俺はその言葉に思わず顔を上げる。まさかあつて間もない奴の頼みを聞いてくれるとは・・・。俺は思わず感激した。殺人鬼が感激するものおかしいか。

よし、今から此奴は人だ！俺は心でそう決めた。

「あの・・・とりあえず手を・・・。」

「ああ、済まない。」

俺はエルザの言葉に手を離す。エルザは自分を落ち着かせるように深呼吸をすると真剣な表情をする。

「任せてください。貴方がきちんと魔力を制御できるよう私が手伝います。」

その顔を見て俺は何となく此奴が戦乙女と呼ばれる意味が分かった気がした。それと同時に此奴自身にも興味がわいた。

やっぱり人間は良いねえ。

俺はジト目で見るマオを無視してエルザと予定を立てると挨拶をして別れた。

「……響夜。」

「何だ？」

「何故私を頼らない!!」

此奴がこういうことは大体分かっていた。いや此奴に教わってもいいが――

「お前だと絶対に何となくっていう答えだと思っただが。」

「……。」

プイツと顔を背けるマオ。やっぱりか。

「でも……少しは我を頼ってくれ。」

「……本当、此奴は面倒臭い。俺はマオの頭を撫でる。」

「……お前には何時も頼ってるよ。むしろ俺がお前を頼らない方が珍しいんだよ。」

「……そうなのか？」

マオは俺を見る。実際そうだ。魔力も知識も全部マオのものだ。此奴がいなかったら俺は何もできない無力な人間。この世界じゃ生きることなんて出来ないだろう。この街に来てからもそうだ、宿の時も竜の時も此奴がいたから俺は安心して戦えた。俺一人なら間違いなく無理だった。

「ああ。」

俺は優しい声で言う。俺は安心出来る奴にしか此処まで近づかない。マオも俺の声を聞いて安心したのか俺に体を預けるようにしてしだれかかる。

「響夜。」

「何だ？」

俺はマオを見る。マオは先程よりも強く押し付ける。

「何でもない。」

心無しかマオの声は先程よりも弾んでいるようだった。

「・・・・・・・・。」

乙女心と秋の空とは言うが・・・殺人鬼にはよく理解出来ないものらしい。

朝日・・・太陽は相変わらずうざったいほど輝いている。普段ならそれを確認して起き上がるが今日は別だ・・・。

「・・・・・・・・響夜。」

マオが相変わらず俺に抱き着いている。気のせいかな何時もより密着しているような・・・。

「・・・・・・・・。」

俺はマオの頭を撫でる。マオはくすぐったそうな顔をする。・・・何だかマオの俺への依存度が上がった気がする。

「・・・・・・・・5時位か？」

時計はないからよく分からんが普段の癖と太陽の角度的にその位だろう。俺は再びマオへ視線を落とす。

「・・・・・・・・ん、・・・。」

よく考えれば俺はマオのことをよく知らない。此奴の生まれなどの素性を一切俺は知らない。

ま、俺も人のことは言えないが。

「・・・・・・・・本当に此奴は・・・。」

良くここまで無防備になれるな。俺だったら絶対に無理だぞ。俺は再びその髪を撫でていく。

「・・・・・・・・ん。」

撫でる。

「……………」

撫でる。

「……………」

「…………アホか俺は。」

今までで一番恥ずかしかったぞ今は……。この世界に来て此奴と会ってから随分変わってんな俺。

昔の俺が見たら何て言うのか。嗤うのか侮蔑するのか。それとも祝福するのか……。いや、それは無いか。

「…………殺人衝動もそこまで起きないんだよな。」

相変わらず生命が輝いている瞬間は見たいが前のように進んで殺しに行くようには無くなっている。これは依頼で魔物と戦えるからか？俺がそんなことを考えているとマオがモゾモゾと動く。どうやらお目覚めらしい。

「……………」

「おはようさん。」

俺は取り敢えずマオにそう言つとマオの頭を撫でる。

「…………ん。」

撫でられていくうちに頭も回転し出したのかマオは顔を真っ赤にし布団に潜る。

「・・・初なのかそうじゃないのかよく分かんねえな。」

取り敢えず起きたマオを引きはがすと俺は着替える。確かエルザとの待ち合わせが十時位。まだ時間に余裕はあるな。

俺はそう考えると今のうちに支度をして何時でも出掛けられるよう準備した。多分マオも一緒に来るんだろうな、などと考えながら。

街の中央通りの一角にある喫茶店。そこに俺達はいた。

「おはようございます。」

「おはようさん。」

「うむ、おはようなのじゃ。」

俺達はそう言ってエルザの対面に座る。

「人が凄いな。」

俺は思わずそう呟いた。周りからの好奇や嫉妬の視線。そんなものにはマオと一緒にいたから慣れていたが今は普段の何倍もの数を感じる。これが有名人パワーか。

「す、済みません。」

エルザも申し訳なさそうに言う。

「構いやしないさ。」

「全くじゃ。」

俺達がそう言うのとエルザは安堵した表情を浮かべる。

「そう言ってもらえると嬉しいです。」

その後他愛もない会話を続けているとやがてエルザは真剣な表情をした。

「それじゃあ、これから魔法の制御の練習をしたいと思います。」

「どんとこい。」

「バッチリじゃ。」

俺達はその言葉に頷く。それを見るとエルザは笑顔で言った。

「それじゃあ私と戦ってください。」

殺人鬼は魔王に影響されたようです（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

今回どこで区切るか迷いましたが今回はここまでまた次回もよろしくお願いします。

変人が集まる殺人鬼の木（前書き）

「・・・・・・・・俺って何だっけ。」

b y 響夜

「!!!?」

b y マオ

変人が集まる殺人鬼の木

「……………は？」

喫茶店の一角。そこで響夜は間抜けな声を出して目の前にいるエルザを見る。

「いえ、私と戦っていただくこと。」

響夜はその言葉に頭を悩ませる。

「（いや、まだ戦闘だと決まった訳じゃない。）」

きつと基礎的な体力とかなだろう。

響夜はそう望みを懸ける。最も魔力と体力にそれ程の結び付きがあるのかを考えれば答えはすぐに出るだろう。それが思いつかないあたり余程テンパッていることが窺える。

「それでは周囲に被害が出ない場所に行きませんかね。」

あ、これ終わった。

響夜はその言葉を聞いてそう悟った。

「（これは人選をミスったかもしれない。）」

響夜はそう思って他に頼りになりそうな人物を考える。

「（受付嬢……無理。ロシエル、後で何を頼まれるか分らん。爺・ギルドマスター」

・俺が何か嫌だ。」

唯一頼りになりそうなマオは感覚とか言い放つだろう。

響夜はそこまで考えるとさらに頭が痛くなってくる。元々友人関係が狭いのは仕方がない。まだ来て二週間も経たないのだ。そこには目を瞑ろう。だが・・・

「（周りに碌な奴がいねえ。）」

本人が教わる側であるのにこの態度というのも自分が碌でもない奴の証拠なのではないだろうか。

現実から逃げようとする響夜にエルザは無慈悲にも現実を突き付ける。

「ほら行きましょう。」

「響夜？どうしたのじゃ？」

女性陣二人は既に席を立っている。響夜はその姿をみると諦めたのか深いため息を吐いて二人を追い掛けた。

今三人は街の訓練場の中にいた。だがそこに立っている三人の顔には既に疲れた顔がありありと出ている。

「・・・まさかあそこまでいるとは。」

「・・・疲れたのじゃ。」

「あ、あはは。すみません。」

疲れきっている二人にエルザは苦笑しながらも申し訳なさそうに謝る。実際有名人と一緒に歩いたことのない二人にはあまりにもキツ過ぎた。歩く度に周囲からの視線を感じ、さらには追い掛けてくる者もいた。お陰で此処に来るために人を撒くのに随分時間が掛った。

「……ふー。」

エルザは一度深呼吸をすると真剣な顔をする。

「もう大丈夫ですか。」

「ああ。」

その顔を見た響夜も観念したらしく何時でも戦えるように心構えをする。マオは二人から離れ端で二人の戦いを見守る。

「この戦いでは魔力というものを感じてもらいます。」

「感じる?」

「はい、魔法を使う時に感じるものでなく、自分の体内に常にあるのを感じるんです。そしたらそれを自分の意思で体内を巡らせて下さい。自分の血管や神経をイメージするといいですね。」

「……なるほど。」

先ほどまでは自分の間違いを悔やんでいたがその考えは180°。

変わった。

目の前にいるエルザの言い方は分かりやすく、彼女が教えなれて
いるということが分かる。ならばそんな大きな間違いがあるという
ことはないだろう。

「（一度の死闘は100の練習の価値があるというしな。）」

響夜はその言葉に納得し目の前にいるエルザを睨む。

「ではマオさん。開始の合図をお願いします。」

「うむ。任されたのじゃ。」

マオはそついうと腕を振り上げる。

「では試合……開始！」

その言葉と共に振り下ろされる腕。

「はっ——」

気が付けば彼女は目の前にいた。

「うお!？」

それに気が付いた響夜は振り下ろされる訓練用の剣を躲す。幾ら
刃が潰されているとはいえ彼女のふる剣速で食らったら大怪我だろ
う。

響夜は魔神の観察眼を発動すると彼女の挙動を見逃さないように
する。

「ふ——」

「——」

彼女が動き目の前に現れた瞬間、響夜は自分が持つ剣で彼女の剣を防ぐ。それを見た彼女は僅かだが眉を上げる。

「やりますね。」

「そりゃどうも!!」

響夜は力任せに剣を振りエルザを弾き飛ばす。鬼神の武勇伝を持っている響夜は普段から常に身体能力が大幅に上がっているため、一ガと素手で渡り合うだけの力を持っている。当然それほどの力で弾かれたらどうなるか。エルザは響夜から引き離され数十mは飛ばされていた。

「只の冒険者ではないようですね。」

「いや、只の新米冒険者だよ。」

響夜の言葉にエルザは不敵な笑みを浮かべる。

「少し本気でいきますよ。」

瞬間エルザの姿がぶれる。

「はっ——」

「!？」

響夜は背後からの一撃を防げないと判断すると危なげなく躲す。

「……やりづれえ。」

響夜はそう言う手と手に持っている剣を捨て想像形成で一振りのナイフを取り出す—— 勿論刃は潰してあるものだ—— と同時にエルザへ駆ける。

まさか剣を捨てるとは思わなかったのだろう。エルザは目を見開くがそれもすぐに真剣な顔になる。

「つ……らあ!!」

それはまるで踊っているかのようなだった。器用にナイフの持ち方を変えながら響夜は目にも止まらぬ速さで攻撃を繰り返す。それをエルザは時に防ぎ、時に宙を待つて躲しながら一瞬の隙を突いて剣で攻撃する。

「つ、本当に……新米ですか!？」

「……ああ! 冒険者としては……新米だよお!!」

お互いは剣とナイフを衝突させながら視線を交す。それも一瞬二人は再び移動しながら剣とナイフをぶつけあう。

訓練場にはただ剣閃がぶつかりあう音だけが響く。既に百合は打ち合っただろうか状況は徐々に響夜の劣勢になっていた。

「……………つち。」

響夜のナイフは直ぐ創れるがその分脆い。響夜のナイフはエルザの攻撃に耐え切れなく砕け散る。響夜は壊れた瞬間に新たにナイフを創りだすがその瞬間、響夜の意識は想像形成に向けられる。それによって響夜は徐々に追い込まれていった。

「・・・やりますね。」

エルザはそこで攻撃をやめる。響夜はそれを不審に思うが原因は直に分かった。

——パキン

エルザが持っていた剣が半ばから折れたのだ。

「・・・貴方の実力なら問題ありませんね。」

その言葉と同時にエルザの背後の空間が歪む。響夜はそれを見て警戒する。

「・・・雷鳴轟かす勝利の咆哮」
フリスト・ヒルド

現れたのは一本の剣。両刃の剣で片手剣だがその形状はレイピアのようにも見える。

そしてその剣は蒼い雷を纏っている。

「・・・本気ってことっすか。」

それを見た響夜は冷や汗が止まらなくなる。あの剣から感じる重

圧を響夜は感じたことがある。

「――神器。」

「私の愛剣。そして私の切り札です。」

エルザはその剣の切っ先を向ける。

「……頑張って戦ってくださいね。」

第三者からみれば綺麗な笑顔だが響夜から見たら死刑宣告としか感じられない。

「――」

エルザの姿がぶれた瞬間響夜の腕に痛みが走る。みれば背後にいるのは剣を構えているエルザの姿。

「（速過ぎだろ。）」

その瞬間響夜から油断という言葉は消えた。

「（一度見られてはいるが……）」

「グレイプニル！」

その言葉と共に響夜の背後そしてエルザを囲むようにしてグレイプニルが出現する。

「な！神器！？」

これはあの時の一瞬ではわからなかったのだろう。エルザは驚きを露にする。

「く——」

グレイプニルはエルザへと向かうだが――

「……は？」

グレイプニルがエルザを縛ることはなくそのままエルザの体を突き抜けて行った。

「……これが私の神器の能力の一つ。自身を雷化し物質を透過します。」

「それ何てチート？」

思わず響夜はそう呟いてしまった。エルザはそんな響夜の間を逃すことなく一瞬で接近すると袈裟切り。

「……っ。」

攻撃自体は響夜のグリモア・ハートで再生するがそれでも痛みは感じる。エルザはそれを見て再び驚愕する。

「……それも神器ですか。」

「……ああ、最低最悪のくそつたれ神器だ。」

響夜は忌々しげに言う。

「そうですか。・・・これ以上怪我をする前に早く魔力を感じ取ってくださいね。」

響夜の顔を見たエルザは黙り込むとそれだけ言っ て剣を構える。

「（・・・魔力。）」

響夜は体内に意識を向ける。

「（マオの魔力は右手から供給されている。）」

ならば右手に何かが流れ込んでいるイメージをすればいいのか？
響夜は首を傾げながらも右手から水が流れ込んでいるようにイメージをしていく。

「・・・・っ。」

エルザの攻撃をなるべく防ぎながらも響夜はそのイメージを固めていく。

「（・・・何かが流れてる？）」

響夜は徐々にだが魔力の流れを感じ始めていた。

「（これが魔力か。・・・これを全身に流れているようにイメージしていく。）」

水路を作りそこに魔力という水を流すイメージをしながら響夜は

徐々に魔力を動かしていく。

「……掴みましたか。」

魔力を感じ取ったのだろう。エルザは剣を振るのをやめ響夜をみる。

「（早い。）」

それが今の響夜への感想だった。常人は魔力の流れを感じ取るのにもう少しの時間を要するというのに目の前にいる青年はそれをもの数分で終わらせようとしている。

「（あのナイフ捌きといい、神器を所有していることといい。）」

エルザはこの青年が何者なのか少し気になった。これが終わったら聞いてみるかと考えていると響夜が魔力を張り巡らせたのを感じ取った。

「……体が軽いな。」

それが響夜の感想だった。驚くほどに今自分の体が軽く感じる。

「魔力を体に張り巡らせば身体強化をすることが出来るんです。」

エルザはそういうと剣を握り締める。

「今から一度剣を振ります。それにそのナイフをぶつけてください。」

「……了解。」

響夜はエルザの挙動を見逃さないよう注意する。次の瞬間、エルザの手が動くのを捉えた。

「（……くる!）」

その瞬間、響夜は僅かに捉えた向かってくる剣にナイフを振るう。

——ガキン——!

金属がぶつかる音と何かが砕けた音がした。

「……。」

響夜の手に持っていたナイフはボロボロに砕けちる。エルザは今の光景を見て驚いた後に笑う。

「お見事です。まさかぴったりで当ててくるとは思いませんでした。」

その言葉に響夜は肩を竦める。

「いや、ギリギリだったさ。お前の手が動く瞬間が見えなかったら無理だっただろうさ。」

「です十分凄いですよ。並の冒険者じゃ今の攻撃など見ることもすら出来ませんから。」

「褒め言葉として受け取っとく。」

「響夜！」

俺たちが話しているとマオが駆け寄ってくる。

「良くやったのじゃ！」

「あゝ、はいはい。」

飛びつこうとするマオを響夜は片手で押えながら投げやりに答える。

それを見たエルザは笑いだした。

「あ？」

「いえ、仲が良いんですね。」

「うむ！」

響夜の代わりにマオが声を上げて答える。

「では、次からはそれを無意識的に行えるようにしましょう。」

その言葉を聞いて響夜はまたこれをやるのかなあ。等と考えながらげんなりする。

「ああ、そうだな。」

「響夜！お腹が空いたのじゃー！」

「はあ？」

その言葉を聞いた響夜は眉を寄せる。

「お前殆ど何もしてないだろう。」

「む、失礼な。響夜を見守っていたじゃろう。」

それを聞いた響夜はマオに何を言っても無駄だということを悟る。

「ほれ、行くぞ。エルザも一緒にどうじゃ？」

マオの誘いを受けてエルザは少し考える仕草をすると快く返事する。

「はい、いいですよ。私も少しお腹が空きましたから。」

「では行くぞ！！」

その言葉と同時にマオは響夜とエルザの手を引いていく。

「（・・・もう殺人鬼のすることじゃねえなあ。）」

傍にいる二人の笑顔と今の自分を見て響夜はそんなことを考え苦笑する。

空には雲一つない青空が広がっていた。

変人が集まる殺人鬼の木（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

殺人鬼は満足できないようです（前書き）

「・・・三人称はマス開けるようにしています。」

b y h i m a

m e

「1111での台詞で言うことじゃねえだろ。」

b y 響夜

殺人鬼は満足できないようです

「・・・・・・・・・・！」

街外れの訓練場。そこに二つの影があつた。一方は白いYシャツと黒のジーンズの白髪の青年。もう一方は黒い軍服のようなものを着た金髪にポニーテールが特徴の女性。響夜とエルザだ。

「ハア——！」

振り下ろされるエルザの剣を響夜は手にしたナイフを滑らすようにして防ぐ。

「——」

響夜はエルザの懷に潜り込むとナイフを一閃。だがその攻撃をエルザは僅かに体を反らして躲す。

エルザは追撃がくる前に素早く距離をとる。二人の距離は再び開き両者は睨みあう。無駄口などしない、そんなことをすれば瞬く間に相手の持つ武器が自分の首を刈り取る。

「グレイプニル！」

響夜は自らの神器を出現させるとエルザに向かわせると同時に自らも駆ける。

「雷鳴轟かす勝利の咆哮——！」
フリスト・ヒルド

エルザは腰にある剣を抜くと共にその名を呼ぶ。すると剣に蒼い雷が纏いエルザ自身にも雷が纏われる。

向かってくるグレイプニルをエルザは雷化によって回避し響夜へとまさしく雷速の速さで迫る。振り下ろされる剣を響夜は周囲に展開していたグレイプニルで防ぐ。如何に雷化といへど剣自体は雷化をしない。それを見抜いた響夜はグレイプニルによる防御にでたのだ。

「（とはいえ、こつちも攻撃する方法がない。）」

そう斬撃は防げるものの響夜はエルザへ攻撃する手段を持っていないのだ。

「（・・・想像・・・形成・・・）」

骸竜との戦いの際に創りだした魔道具。創りだすものは違えど響夜は再びそれを行おうとしているのだ。

「（・・・何を？）」

響夜が膨大な魔力を集中させるのを感じたエルザはそれを危険と判断し響夜へと疾走する。

「——————心眼。」

その言葉と同時に響夜の手に現れるのは一つのペンダント。鎖に繋がれたペンダントはまるで目を思わせる様な形をしている。

「発動。」

その言葉にペンダントが砕ける。響夜はそれを確認するよりも早く目の前に迫っていたエルザへとナイフで一閃した。交錯する二人。その結果は――

「――」

響夜の右腕に走る痛みと僅かに焦げた臭い。だがその代償を払っても得たものは大きかった。

「――」

茫然とした様子で自分の頬に手を触れるエルザ。その手には血が付いていた。

「……どうやって私に攻撃を？」

エルザはそれを聞かずにはいらなかった。今まで同じクラウン以外の者――ましてやクラウンでもほんの一部の者しか雷化した自分に攻撃出来た者はいない。それをまだ魔力を感じ始めたばかりの者に破られる。これは彼女に大きな衝撃を与えただろう。

「……俺のスキルだ。一度だけあんたに攻撃を届かせることが出来る。」

その言葉にエルザは響夜の手に現れたペンダントを思い出す。エルザは剣を鞘に戻すと響夜へ振り向く。その顔はとても生き生きとしたものだっただ。

「今日はこれで終わりです。私にとってもいい勉強になりました。」

そう言ってエルザは頭を下げる。

「いや、俺のほうがいい勉強になった。ありがとよ。」

響夜はそう言つとエルザへと手を差し出す。それを見たエルザも笑顔で響夜の手を握り握手した。

「そんじゃ次も頼むは。」

「はい。その時はまたお願いします。」

そう言つとエルザは訓練場を出て行つた。一人残つた響夜は樽を創りだすとそれに座る。何故樽を創つたのかは簡単なもののほうが想像もしやすいからだろう。

「・・・・・・・・。」

響夜は空を見上げる。

「（・・・・・・・・やっぱり少し物足りないな。）」

決してエルザとの戦いがつまらない訳ではない。むしろ響夜としてはこうして戦えるのは大歓迎だ。ただ響夜は血が見たいだけなのだ。訓練では出血など殆どない。エルザが手加減をしているというものもあるのだろうが響夜自身エルザを殺す気などない。

ヒトに手は出しても人には手を出さない。

それが響夜の基本理念だ。自らが信用できる者、気に入った者は人として見るがそれ以外はヒト。理科の実験動物マウスと同じだ。殺して

も特に何も感じない強いて言えばその時に感じる生命いのちの輝きを見ることが楽しみというだけだ。

「ギルドでも行くか。」

何か面白い依頼があれば行つてこよう。そう考え響夜は手を翳すと黒い穴を開けそこに樽を入れる。倉庫と呼ばれる空を使った魔法だ。生物は入れられないが自身の魔力によってその大きさは変わり中に様々なものを入れられる。マオから教わったこの世界のものだ。

「・・・・・・・・。」

響夜は一度周囲を見回すとギルドへと足を運びに行った。

視線、視線、視線、街中を歩いている時も数こそ減ったもののギルド内でも響夜は視線を感じていた。

「（俺はパンダじゃねえんだよ。）」

その視線にうんざりしつつも響夜は進んでいく。こればかりは仕方がないと響夜自身思っているところもある。普段からマオという美女と一緒にい、つい先日はエルザも入れて三人でいる所を見られている。それによって響夜の顔を覚えている者は多くそれがこの視線である。

「よう。」

「あ、こんにちは。有名ですよ響夜さん。戦乙女ヴァルキュリアと一緒にいたって。

」

最早響夜とマオの専属と化してきている受付嬢から挨拶兼聞きたくない話を聞きながらも響夜は依頼を探す。

「そうそう、おめでとございます響夜さん。Bランクになりましたよ。」

「・・・・・・は？」

響夜はその言葉に間抜けな顔をする。響夜はついこの前Dランクになったばかりだった。それが何時の間にかBランクなどとても信じられるものではない。

「いえ、つい先日エルザさんがいらしてDランクにしておくなんて勿体無いと。それを聞いたマスターもそう思っていたらしく、ならBランクに上げるかと。・・・・これは結構異例のことですよ。しかも戦乙女のお墨付き。」

そう言っ受付嬢は笑う。響夜にとっては堪ったものではない。また妙な視線が増えるのではないかと響夜は頭を抱えそうになった。

「・・・・・・畜生。」

こんな所で頭を抱えていたら余計に目立つ。響夜はそう考えるともう諦めて依頼に目を通していく。よく考えればBランクなら骨のある魔物と戦えるかもしれない。そう考えた響夜は一通り面白そうなものを取る。

アース・ドラゴン
・地竜討伐依頼

・古城調査

・遺跡探索

ホワイト・ウルフ
・白銀狼討伐依頼

「……どれが良いかね。探索なら魔道具が手に入る確率があるし神器も有り得る。討伐は中々強そうな奴らだし。」

「白銀狼。行こうか。」

丁度Bランクがどれだけのもの七日を知っておきたいしな。響夜はそう考えると依頼書を受付嬢へと渡す。

「気を付けてくださいね。」

「ああ。」

響夜は受付嬢のそんな言葉を聞きながらギルドを出て行った。

かた……かた……

馬車に揺られながら響夜は今回の依頼の内容と白銀狼がどんな生物なのかを見ていた。

「……知能も優れている。注意すべきは氷魔法と脚力か。」

情報を見る限りだとこれ選んで正解だったかもな。

響夜はそう考えながらスキルを倉庫の中から幾つかの魔道具を取り出す。これを買うために響夜は今までなるべく報酬の高い物を選んで受けてきた。マオにも秘密にして・・・。

魔道具が放っている魔力はどれも一級品であった。幾ら報酬の高い依頼を受けてきたとは言ってもやはりE、Dランクでは限界がある。どうやってこれを手に入れたのかは無論秘密である。

「世界が変わっても人間の考えることは変わらないねえ。」

まあ、この世界では人間だけではないが。と内心で付け加えた。

「冒険者さん。着きましたよ」

やがて馬車が止まると声が聞こえる。響夜は馬車を降りると男に金を渡し礼を言う。

「しかしどんな依頼なんですか？」

「あ？・・・白銀狼だとさ。」

それを聞いた男は目を丸くすると乾いた笑いを漏らす。

「そ、そうですか。んじゃ私はこれで・・・。」

男はそう言うのと馬車をUターンさせてやがて見えなくなった。響夜はそれを確認すると山の中へとはいっていく。

「・・・・・・・・・・。」

山に入っただけで異常が分かる。凍っているのだ木々や大地が。響夜はそれを見ながら白銀狼の魔法を思い出す。

『氷魔法』複合魔法というもので氷なら大地と水の魔法を合わせることによって作りだされる魔法である。他にも雷ならば風と火の複合魔法という様に種類がある。因みにエルザはこの複合魔法の雷を得意としている。

響夜は凍っている葉に触れるとそれは砕け小さな欠片となって大地に落ちる。

「……とんでもねえな。」

どうやって白銀狼に会うか。この凍った雪山では遭遇する前に凍え死ぬ。

「……燃やすか。」

響夜はそう考え、巨大な火柱を放つ。それは周囲の氷を木ごと燃やしつくし響夜の視界は火の海になっていた。響夜は魔神の観察眼を発動すると周囲を確認する。

「――」

響夜は草が揺れる音がすると同時に大きく飛び退く。すると先程まで立っていた場所に巨大な氷柱が突き刺さっていた。

飛ばされてきた方向をみるとそこにいるのは全身に毛並みの良い白銀の毛を生やし強靱な四肢で大地を踏みしめている巨大な狼。間違いなく白銀狼である。

「!!!!!!!!!!!!!!」

咆哮。それは山中に響き渡る。
それを合図にして響夜と白銀狼の戦いが始まった。

殺人鬼は満足できないようです（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

殺人鬼の怒り（前書き）

「……………優しく殺してやるよ。」

b y 響夜

少しだけグロい（？）です。

殺人鬼の怒り

寒い。それが響夜の最初に感じたことだった。先程まで火の海だった大地が今では凍てつき始めている。

「・・・・・・・・・・。」

響夜は自分の周囲に魔力を纏いそこに火の魔法を発動する。火は響夜の周囲を魔力を伝って響夜とその周りを温める。

「（魔力の使い方は学んどいて良かったな。）」

響夜はエルザに感謝しつつ目の前の白銀狼を見る。白銀狼も響夜の出方を窺っているのかその場から動かない。響夜はそれを確認すると懷からグロックとデザートイーグルを取り出す。

「派手に踊りな。」

響夜はその言葉と共に引金を引く。火薬の弾ける音共に放たれる銃弾と硝煙の臭い。銃弾は幾千もの針となって白銀狼を襲う。

「――」

だが白銀狼はその全てを躲し響夜へと接近する。

「化物め！」

それを見た響夜は舌打ちをして後退する。その間も白銀狼へと狙

いを定めるがその全てを尽く躲される。響夜から見たら竜と戦った時と同じ悪夢のような光景だ。

「（零距离でないかと当たらねえか。）」

そう判断した響夜は銃を倉庫へ入れナイフを取り出すと自らも白銀狼へ接近する。一瞬にして零になる二人の距離。白銀狼の攻撃をナイフで捌きつつ響夜は懐に入り込もうとするが白銀狼は氷柱を地中から突き出しそれ以上の接近を許さない。

「ふっ——」

次々に繰り出される氷柱を魔力による強化で弾き、躲す。だが響夜と白銀狼の距離が開いた瞬間、響夜は横からの衝撃に吹き飛ばされる。響夜はその衝撃によって驚く間もなく木に叩きつけられる。その衝撃に息を詰まらせるが痛みを無視して素早くその場から転がる。その瞬間先程までいた場所に次々に突き刺さる巨大な氷柱。

「燃やせ！」

響夜は炎の蛇を創ると白銀狼へと放つ。

「オオオオオン——！」

白銀狼が一声鳴くと激しい冷気が放たれる。それは炎の蛇を凍てつかせ蛇は粉々に砕け散った。直後白銀狼へと次々に炎弾が放たれる。それは大地へとぶつかり衝撃と爆風によって冷気を吹き飛ばす。

「燃え尽きろっつてんだろっがあ——！！」

響夜はその手に今までの比ではない程の炎弾を作りだす。それから放たれる熱気だけで周囲の氷が解け始める。

「ラァ——！！！」

響夜が放った特大の炎弾を白銀狼は危険と判断したのかそれを躲そうとする。

「甘いんだよ！！！」

放たれた炎弾は白銀狼へと迫る中突如爆発した。それによって再び巨大な火柱が立ち白銀狼はそれに飲み込まれた。

「断頭台」
ギロチン

響夜は周囲に断頭台の刃だけを創り出し展開する。その数三十以上。それは響夜が腕を振るつたと共に火柱の中にいるであろう白銀狼へと殺到する。

「■■■■——！！！！」

それは断末魔の叫びだったのだろうか火柱の中から咆哮が轟く。響夜は火柱を警戒するように見ている時それは起こった。

ピキ………ピキピキ……

凍りだしたのだ。何百度という熱量を持っている巨大な火柱が。

「な——」

その光景に思わず響夜は目を疑った。それはマオから供給されていた魔力を一気に使用して放った一撃。今までの攻撃でも相当な威力を誇っている。

「……………」

やがて火柱は巨大な氷柱へと変わり砕け散った。中から現れるのは全身に切り傷を負い血を流しながらも堂々と歩く氷で全身を覆った白銀の狼。

その姿は孤高であると同時に幻想的な雰囲気を放っていた。

「……………」

響夜はその光景に目を奪われていた。

……美しい。

そう思わずにはいらなかった。その姿だけでなくあの業火と刃を食らってもなお立ち上がり、より一層と燃え上がらせているその闘志に。

「……………素晴らしい。」

響夜は一步白銀狼へと近づく。その顔には今までにない程の笑み。

「ああ……いいぜえ。美しすぎる。美しすぎるお!!? 何だその生命はよお? ああ、ぞくぞくしやがる!! 待ってるよお? 今から、その全身を……真つ赤な血で綺麗に飾ってやるからよお!!」

響夜は一本の長剣とナイフを両手に持ち白銀狼へ駆ける。

「■■■■■■！！！！」

白銀狼も迎え撃つ様にその氷によって強化された右腕を振るう。

「ヒyahははハハハ！！！！」

その右腕を響夜は右手に持つ長剣でその右腕を防ぐ。そして冷氣によって響夜の手が凍る。

「こりゃあ良いなあ！お陰で剣を握らなくても済むぜえ！！！」

響夜は更に高笑いをする。本能を表に出した響夜は今までにない程の戦闘に高揚していた。その実狂っている様に見えても危険と判断したものを本能で感じ取り躲し、防いでいく。

一閃。左手に持ったナイフは浅いものの白銀狼を切り裂いた。

「■■■■■■——」

白銀狼は今の響夜を危険と判断し距離を取ろうと飛び退こうとする。だが——

「おいおいおい？なあに離れようとしてんだよ。もっと楽しもうぜえ！！！」

響夜はそれをさせまいと間合いを詰めていく。

「グレイプニル！！」

速度の差か響夜はこれ以上離されないよう白銀狼と自分の右腕を

鎖で繋ぐ。

「もっと遊ぼうぜえ！！」

響夜は息をする間も与えないかの様に器用に長剣とナイフを扱って連撃を繰り出す。次々に切り裂かれる白銀狼。それに対して響夜は傷を負ってもグリモア・ハートによって再生し、魔力で温度を上げ凍るのを防いでいる為精々動きが多少鈍る程度。

動きを制限された白銀狼は響夜の右腕を狙い鎖を外そうとする。

「それでも食らいなあ！！」

響夜は白銀狼へ幾つかの赤い宝石の様なものを投げる。それは白銀狼の顔で発光し轟音と共に爆発した。響夜が持ってきていた魔道具。それは魔力を込めることによって爆発する物だったのだ。当然その威力は強く。まじかにいた響夜も吹きとばされ右半身が消え去る。

しかしそれも一瞬。響夜の体はすぐさま再生し、地に倒れ伏している白銀狼へ近づく。

「おいおいまだ戦えんだろお！？もういつちよ俺と踊ってくれよ！！」

次の瞬間響夜は木に叩きつけられた。見れば白銀狼はその尻尾を揺らし低く唸っていた。徐々に高まる魔力。響夜はそれを感じて口元をより一層歪める。

「キキキ、良いじゃねえか。そうだよ！それだよ！それが俺は見たかったんだよお！？」

[.....] !!!!!!!

響夜もまたそれに対抗するように魔力を練り上げる。次の瞬間白銀狼は大きく口を開けそこから冷氣と氷の暴風が放たれる。

「火葬祭」

響夜の全身を覆う炎。それは響夜の体を焼き尽くし迫りくる暴風に拮抗する。

[.....]!

「才才才才才才才！！！！！」

ぶつかりあう氷狼と炎の魔神。それは互いに拮抗していたが――

「才——！！！！！！！！」

その勢いを増し徐々に氷を飲み込んでいく炎。それはやがて白銀狼へと迫り飲み込んでいった。

焼け焦げ凍てついた矛盾した大地。そこに白銀狼は倒れ伏し響夜はその白銀狼の傍らに立っていた。

⌈
•
•
•
•
•
•
○
⌋

「ひゆーひゆー」

白銀狼はもはや虫の息だった。白銀狼は倒れ瀕死になろうとも響夜を睨み続ける。その瞳には隙を見せれば殺られると思わせるだけのものがあつた。

故に響夜は油断しない。何より響夜は目の前の白銀狼に敬意を覚えていた。だからこそここで殺す。

そう思い響夜がナイフで止めを刺そうとした瞬間。

!!!!!!!!

目の前が白に染まつた。

響夜はそれに飲み込まれ上空へ吹きとばされた。重力によって地上へと落下する響夜。

ゴキイ！

叩き落とされた彼からは嫌な音がした。

暫く彼は状況を整理すると倒れたまま僅かに辺りを見回す。そして聞こえてくる男達の声。

「しかし、確認する意味あるんすかねえ。あれだけの規模の魔法食らったんすよ？」

「念には念をだ。奴は白銀狼を倒したのだぞ。もしかしたら生きているかもしれん。」

聞こえてくる男達の声と足音から数は5。

「断頭台」

燃え移った炎に男は苦しみ叫ぶが響夜はその声を無視して掴んでいた男の両足を切り落とした。男は痛みを訴えるように叫ぶが誰もそれを助けられない。いや動くことが出来ないのだ。先程まで死んでいた男が立ち上がったという事実には。

「グレイプニル」

その言葉に一人の男は足を鎖で巻かれ何度も何度も地面に叩き付けられる。

「ぎゃ！ぶつ！・・・あ、が。くぶう！？・・・た、たすげえ！！？」

例え何を言っても響夜はその言葉に耳を貸すことなく更にその勢いを強くする。この男達が白銀狼に手を出した時点で助ける等という考えは露ほどもない。

響夜は目の前の二人に歩いていく。二人は仲間たちの突然の死に動揺しているが響夜へと武器を構える。

「ハ——」

一人の男が魔法を発動する。放たれたのは水流。それは響夜へと当たるが——

「・・・・・・アイアンメイデン
鋼鉄の処女。」

その男は後ろから出現した拷問器具に一瞬にして鋼鉄の処女の中へ引き込まれ、断末魔と血が流れだす。

「・・・・・・・・え？」

その光景が信じられなかったのだろう。最後の一人は間拔けな声を上げ、それを理解すると共に尻もちを着く。

「あ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・。」

男は歩いてくる響夜をみると顔を青ざめ逃げ出そうとする。

「グレイプニル」

だが響夜はそんなことをさせはしない。男の四肢を鎖で繋ぐと空中に磔にする。

「ひ、ゆ、許してくれ!!」

男の目に映っているのは墨のように焼け焦げた仲間と未だに何度も地面に打ち付けられている仲間。それを見た男は涙を流し、その体を振るわせている。

「・・・・・・・・頭蓋骨粉碎器」

響夜の言葉と共に目の前の泣いている男の頭に器具が取り付けられる。ギリギリと締め付けていく器具。男はじわじわと締め付けられる恐怖に漏らす。

「い、嫌だ！死にたくない！頼む、頼むから助けて!!お、お願いだから！あ、ああ、！」

男の声を無視して響夜は背を向ける。後ろから男の悲鳴が聞こえるが響夜はそれすらも無視して無表情のまま白銀狼に近寄り炎を消した。

「……………」

僅かだが白銀狼は生きていた。だがその体は力なくぐったりと倒れ目も瞑ったままだ。

「…………後味悪いだろうが。」

響夜は小さく舌打ちをすると想像形成を使う。

「勝手に死んでんじゃないよ。」

響夜の手握られたのは小さな短剣。響夜はそれを白銀狼に刺すと魔力を流し込んだ。

「……………」

響夜の全身を疲労感が襲う。だが先程より白銀狼の息は少しだけ落ち着いていた。響夜はそれに少しだけ安堵しつつ。響夜は辺りを見回す。

「…………ゴミ共が。」

そう言って響夜は魔族達の死体を焼き尽くすと白銀狼を再び見る。

「お前もゆっくり休みたいもんな。」

響夜は白銀狼にそう言うとグレイプニルを籠のようにして白銀狼を持ち上げた。

「・・・・形成。」

創り上げたのは小さな小屋。丁度白銀狼が入れる程度の余裕のある小屋である。響夜はそこに白銀狼を運ぶと自らもその小屋に入った。

「・・・・ま・・ず。」

響夜は立ち眩を起こす。先程の治療。魔力と一緒に響夜は生命力も流し込んでいた。如何に響夜が半不死といへど流石に生命力は不味かったのか。響夜は白銀狼を寝かせるとそのまま倒れるようにして眠りに落ちていった。

殺人鬼の怒り（後書き）

感想、批判、意見がありましたらどうぞ送ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7170y/>

殺人鬼は異世界に来てしまったようです

2011年11月30日00時56分発行